

愛の手紙

——スタンダールの『恋愛書簡』に寄せて——

寺西暢子

[.....]。クレリアが、愛し児に生き永らえたのは、数カ月に過ぎなかったが、しかし、彼女は、恋しいひとの腕の中で息をひきとるといふ喜びを味わった。

ファブリスは、自殺という手段に頼るには、愛し過ぎていたし、信仰心も深かった。彼は、あの世でクレリアと再会することを願っていたが、また、知性にもあふれていたもので、償わなければならないことが沢山あると感じないではいられなかった。

[.....]。

[.....]。伯爵夫人は、ひとことと言うなら、あらゆる幸福の外観を一身に集めていたけれど、ファブリスに先立たれると間もなく亡くなった。彼女は、ファブリスを熱愛していた。そして、ファブリスがその僧院で過ごしたのは、一年だけであった。

パルムの牢獄は空になっていて、伯爵は大変な金持ちになり、エルネスト五世は、臣民から慕われていた。彼らは、エルネスト五世の治世をトスカナの大公たちの治世と比較している^{*)}。

『パルムの僧院』第二巻、第二十八章からの引用である。同じ二十八章の終わりから三分の一程のところ、語り手は、クレシェンチ侯爵邸にあるオレンジ園での、ファブリスとクレリアの逢引の場面を描いている。そして、「崇高な幸福の三年間²⁾」が続くが、語り手はこの三年間を殆ど語らない。やがて、その「崇高な幸福の三年間」の象徴とも言うべきサンドリーノ（彼は、ファブリスとクレリアの間に生まれた息子であったが、現実には、クレシェンチ侯爵夫妻の子として育てられていた。）の死が、物語の主要人物の死の引き金となる。恋人たちの死に、サンセヴェリーナの死が続き、ひとり取り残されたモスカ伯爵の様子と、パルム公国の政治情勢に簡単に触れて、スタンダールは、後世、批評家たちが「*le roman du bonheur*³⁾」と呼ぶようになるこの小説を締め括る。なぜ、彼は「崇高な幸福の三年間」の後に、このような恋人たちの死を以て終わるといふ、言わば、古典悲劇的な結末をつけ加えたのか。ファブリスが至福の時を過ごしたパルムの牢獄が空になったということ、そして、エルネスト五世が優れた君主としてパルムに君臨しているということには、どんなメッセージが込められているのか。四人の主要人物のうち、モスカ伯爵だけが、ただひとり生き永らえているのはなぜなのか。こうした疑問は、初めてこの小

説を読み終わった折に味わった苦々しい思いと共に、今も、私の頭の中で、明確な答えを得られぬままに残っている。

*

今から四年前の1993年、ヴィクトール・デル・リット氏の編纂で、フランスのシャン・ヴァロンという出版社 (Editions Champ Vallon) から『スタンダール：恋愛書簡』というタイトルの一冊の本が出版された⁴⁾。スタンダールの『書簡集』というと、長年、三巻本のプレイヤッド版が定本となっていたが、もう、かなり前から手に入らなくなっていた。幸いにして、この三月から、パリのオノレ・シャンピオン書店より、今度は、六巻本で新しい『書簡集』が刊行される運びとなったらしい。こうしたいわゆる〈les éditions critiques〉が、我々、専門家にとって必要欠くべからざるものであるということは言うまでもない。だが、愛読書として無人島に携えて行くには、如何せん物理的にも内容的にもこの手の版は、いささか重すぎる。それに対して、シャン・ヴァロン社の『恋愛書簡』は、横が12cm、縦18.5cm、ほぼ、日本で言うところのB6版に相当する大きさで、厚さは18mm、ページ数 210ページ、非力な私でも片手で楽に扱える。表紙の色はマロン色、そこに白い大文字で、「STENDHAL / LETTRES / D'AMOUR」と、タイトルが三行に渡って印刷されている。デル・リット氏の序文によれば、フランスでスタンダールのこうした恋愛書簡集が出版されるのは初めてだそう⁵⁾。日本では、人文書院の『スタンダール全集』の第八巻に『恋愛論』とともに『恋愛書簡』が収められている⁶⁾。とはいえ、この邦訳も、どちらかと言えば、プレイヤッド版のような〈une édition critique〉に近く、箱入りだったり、パラフィン紙がついていたりして、気軽に持ち歩くのに向いているとは言えない。ちょっとスタンダールに興味を抱いた女子学生が、彼が恋した女性にどんなラブレターを書いたのか、公園のベンチや電車(メトロ?)の中で開いて読める本——シャン・ヴァロン社の『恋愛書簡』には、そんなイメージがある。

*

デル・リット氏は、彼が編纂した『恋愛書簡』を大きく二部に分けている。「DANS LA VIE」と題された第一部においては、先ず、アンリ・ベールが生前に恋した女性と交わした手紙が集められている。しかし、例えばプレイヤッド版のように、予め全ての手紙を「スタンダールの手紙」と「スタンダールへの手紙」に分け、更に、それぞれを書かれた年代順に配列するといったような方法は取られていない。デル・リット氏は、スタンダールの愛の手紙を当事者同士の間で交わされたであろう形を再現するべく、「Angela / Mélanie / Alexandrine / Angéline / Matilde / Clémentine / Giulia」の七章を設け、最後に「Dernière velléité de mariage」というタイトルの下に、晩年のスタンダールが〈un mariage de raison〉を考えて、未亡人となったラキエ男爵夫人に宛てて書いた手紙をつけ加えている。「Angela」に始まる七つの章は、その章のヒ

ロインとなる女性がベールの人生を「恋人」として彩った順に並べられている。また、各章の最初には、収められた手紙を理解するのに必要な範囲で、その女性とベールの関係を説明したデル・リット氏による簡単な解説が添えられている。更に、章の内部では、それぞれの手紙は、「アンリからの手紙」「アンリへの手紙」の別なく、年代順に（日付のはっきりしない書簡については、類推が可能な範囲で）整理、分類されている⁷⁾。こうして、読者は七つの恋愛の物語を読むことが出来る一方、アンリ・ベールの恋愛の軌跡をひと通り辿ることが出来る。装丁も簡素であり、コンパクトにまとめられているとはいえ、内容という点で考えた時、この『恋愛書簡』は、決して軽いものではないかも知れない。他方、第二部「DANS LA FICTION ROMANESQUE」では、スタンダールの小説の中に現れる恋人たちの手紙の中から、『アルマンズ』、『赤と黒』、『カストロの尼』の中の計十一通の手紙が収録されている。こうした構成を取った理由として、デル・リット氏は、その序文と解説の中で、かつて手紙が恋人たちにとって、唯一の、そして、最も都合の良いコミュニケーションの手段であり、そうした事実が文学の領域に「書簡体小説」というジャンルをも生んだことを述べている。スタンダールは書簡体小説を書いた訳ではないが、作品の中で必要に応じて、巧みに恋人たちの手紙を配置した⁸⁾。プライベートな手紙と架空の作品の中に挿入された手紙を並列することは、この『恋愛書簡』の内容を豊かにするだけでなく、作家スタンダールの世界における「恋愛」において、「手紙」というものがどのような役割を演じ、また、どんな意義を持っているのか、といった問題を探ることを可能にしてくれると思う。あるいは、氏は、1981年に出版されたプレイヤッド版の新しい『私的作品集』の序文の中で、スタンダールが一見して多岐に渡るジャンルの作品を執筆していることに触れ、「実際は、スタンダールはただひとつの作品しか書かなかった。[.....]。そして、その唯一の作品の主人公は彼自身である⁹⁾。」と述べている。従って、こうした見解もまた、この『恋愛書簡』の構成を裏付ける理由のひとつと考えられるかも知れない。

とはいえ、第一部に収録されている手紙の数は決して多くはない。理由は簡単である。デル・リット氏に拠れば、スタンダールは自分の書いたものは、ただのメモでも大切に保管し続けた数少ない作家のひとりだそう¹⁰⁾。物を書く人間というものは、多かれ少なかれ、たとえそれが日記のようなプライベートなジャンルに属するものであっても、ひとに読まれることを（少なくとも潜在的には）前提にしているものである。しかし、その一方で、常にプライバシーやスキャンダルの問題がつきまとう。況して手紙の場合は、本来は特定の個人の間のみで交わされるはずのものであるし、しかも相手のこともあるから、しばしば、本人や残された家族が焼却してしまう。それが、ラヴレターともなれば、処分される確率が一層高くなることは言うまでもない。ベールの愛の手紙も例外ではなかった。デル・リット氏は、スタンダール本人が愛人から貰った手紙を、自ら破棄した可能性は極めて低いと見ている¹¹⁾。そこで、私は、この『恋愛書簡』に収められた五十一通の手紙が、どのような過程を経て、今日、私たちの手元に届いたのか、私なりに辿ってみたいとなった。参考にした文献は、先ず、『恋愛書簡』のデル・リット氏による序文と各章の最初に添えられた解説。次に（既に述べたように、このシャン・ヴァロン社の『恋愛書簡』は「une édition critique」ではないので）、新しいスタンダールの『書簡集』が出揃うのを待つ間、

差し当たって、プレイヤッド版の序文や注釈を中心にして、更に（プレイヤッド版の第三巻が出版されてから三十年近い歳月が流れていることを考え）、1995年に刊行されたグルノーブル市立図書館の目録（草稿編¹²⁾）や、同じく1995年刊の『ロシア戦役：アンリ・ベール——またの名をスタンダール——の足跡を辿って』¹³⁾等も参照した。また、前出の人文書院発行の邦訳の『恋愛書簡』の注釈は、基本的にはプレイヤッド版を底本としているが、翻訳者の鈴木昭一郎氏によってつけ加えられたものもあり、こうした注も参考にさせて頂いた。こうして、愛の手紙の軌跡を辿ることで、改めてベールの恋愛がどのようなものであったのかを考えたい。そうした試みは、また、同時にスタンダールの「生」の意味をも問うことになると思うからである。

*

«Angela»——言うまでもなく、アンジェラ・ピエトラグリユアのことである。この章には、「アンジェラからアンリへ」宛てた二通の手紙が収められている。二通とも原文はイタリア語で書かれ、ついで、脚注の形で、スタンダールが手紙の余白に残したメモと、手紙のフランス語訳がつけ加えられている。プレイヤッド版の注に拠れば、この二通の手紙はオリジナルが存在しており、プレイヤッド版編纂の折に、グラウコ・ナトーリ (Glauco Natoli) という人物がデル・リット氏の要請に応じて、手紙を写し、フランス語訳をつけたらしいが、氏自身は、自筆原稿との照合を行わなかったようである¹⁴⁾。しかし、その後、原文を検討する機会に恵まれたのであろうか、例えば、二通の手紙のうち、1815年12月1日付の手紙の余白に書き込まれたスタンダールのメモのうち、プレイヤッド版では«cède»となっていた箇所が、『恋愛書簡』では«réduis»となっている¹⁵⁾。手紙の内容については、二通とも、ベールがアンジェラに散々、振り回された挙げ句、喧嘩別れした頃に書かれたものであるから、推して知るべし。

«Mélanie»——メラニー・ギルベール。鈴木昭一郎氏は「スタンダールが恋した多くの女性のうち、おそらく最も彼を愛したのは彼女であろう¹⁶⁾。」と書いている。ここに収録された八通の「メラニーからアンリへ」の手紙は、率直でやさしげな人柄と、恋人への愛情の深さを伺わせるものがある。デル・リット氏の解説によると、これらの八通の手紙のうち、「最初の五通は、スタンダールの手になる写し、残りの五通(!)は、作家の書き残した文書の中に残されていたオリジナルの手紙¹⁷⁾」だそうだ。誤植でなければ、この文章をどう解釈したらいいのか分からないのだが——私の単純な頭では、 $5 + 5 = 8$ にはどうしてもならないので、そこで、他の文献を当たってみた。実は、プレイヤッド版には、メラニーの手紙は九通あり、そのうち、1805年5月23日付の手紙の注に「スタンダールはメラニーの手紙の写ししか保管しなかった¹⁸⁾。」とある。しかし、その写しの所在が注釈に「グルノーブル図書館」と明記されているものは、九通のうち三通のみで、この三通は、『恋愛書簡』の中の「メラニーからアンリへ」の手紙の二通目から四通目に当たる¹⁹⁾。ただし、プレイヤッド版所収の九通の手紙は、同版の編纂時に全て、なんらかの自筆原稿との照合が行われた印がついている。尚、九通のうち、今回の『恋愛書簡』に収録されなかったのは、1806年3月6日付の手紙である。

他方、グルノーブル市立図書館の目録に拠れば、先ず、バールの友人であったルイ・クロゼの遺族から寄贈された草稿の中の『合本（一）』の第二十五巻に« [Correspondance]. / [Lettre de Mélanie Guilbert]. — « Je suis arrivée [...] [...] j'ai reçu des [...] ». — Copie de la main de Stendhal de 3 lettres de Mélanie Guilbert, à lui adressées. / S.l., [mai-juin 1805]. » という項目がある²⁰⁾。従って、メラニーの三通の手紙のコピーが保管されている、という点では、プレイヤッド版の注釈と一致するのだが、しかし、今、引用したばかりの« Je suis arrivée [...] [...] j'ai reçu des [...] » という文面は、(もし、途中が抜けたりしているのでなければ)『恋愛書簡』に収められた「メラニーからアンリへ」の手紙の一通目から四通目までの四通の手紙の内容が、そのスタンダールの手になる写しに含まれていることを示している。また、この四通の手紙は、1805年の5月と6月に書かれたものとなっているので、目録の« [mai-juin 1805]. » という記述とも矛盾しない²¹⁾。一方、メラニーのオリジナルの手紙は、というと、同じくクロゼの遺族から贈与された「スタンダールへの書簡集（一）」の中にメラニー・ギルベールが彼に宛てた手紙が五通含まれている。しかし、このうちの一通は、先に触れたプレイヤッド版にはあるが、『恋愛書簡』にはないという1806年3月6日付の手紙である²²⁾。従って、 $5 + 5 = 8$ という数式の謎を解くには、新しい『書簡集』の第一巻が私の手元に届くのを待って、その注釈を当てにするか、それでも答えが出なければ、自分でグルノーブルの市立図書館で草稿を検討するしかなさそうだ、という中途半端な結論しか出て来なかった。

ところで、既に述べたことだが、愛の手紙は処分されやすい。にも拘わらず、メラニーの五通の手紙が、現在でもグルノーブルの市立図書館に保管されているのは、これらの手紙を写した後、破棄するよう兄から指示されていたスタンダールの妹、ポーリーヌが兄の指示に従わなかったからだ²³⁾。その一方で、スタンダールの書いた手紙が今日まで伝わっているのは、ラヴレターを書くとき、彼が念入りに下書きをしたかららしい²⁴⁾。『恋愛書簡』に唯一、収められている「アンリからメラニーへ」の手紙もまた、そうした下書き (un brouillon) のひとつであった。この手紙も、現在、グルノーブルの市立図書館蔵で、クロゼの遺族により寄贈された「多岐に渡る種類のメモ集（一）」の中に在る²⁵⁾。プレイヤッド版編纂時に、既に、この自筆の下書きとの照合が行われており、同版のこの手紙の注釈にはその下書きがどのような状態か、十三箇所について、ヴァリエントや削除された部分等に関する丁寧な説明がついている²⁶⁾。後に触れるマチルドへの手紙の下書きに関する注釈と合わせて、こうしたヴァリエント等を検討していると、(まだ、私自身の目を見た訳ではないのだが) デル・リット氏が、スタンダールのラヴレターの下書きを« assez laborieux » という言葉で形容しているのも、ある程度、納得が行く²⁷⁾。そして、ここで、デル・リット氏は、「情熱 (la passion)」を語ろうとする場合に下書きをする、というのは単に矛盾するばかりか、滑稽でさえある行為ではないか、という当然湧いて来そうな疑問に対して予防線を張る。氏は、スタンダールにとって、愛の手紙というものは、説得力を持っていなければならないものであり (convaincante)、こうした下書きは言わば彼の日記の一部でもあった、また、幸いなことに、下書きをしたからといって、自然な感情の発露を妨げるような結果にもなっていない、とスタンダールを弁護している²⁸⁾。確かにスタンダールは「情熱 (la passion)」を表現し

ようとする度に、言語の無力さを感じており、だからこそ、表現を可能にする新しいレトリックを意識的に探究していたと思う。また、彼が「説得力がある」と感じる文章が、彼が嫌った大仰でペダンチックな文章でなかったであろうことも、容易に想像出来る²⁹⁾。しかし、事をもっと単純に考えられないであろうか。私としては、そもそも、一般論として、愛のディスクールが「説得力がある」ものである必要があるのかどうか、いささか疑問があるのだが、それはともかく、「恋する」ベールの心情を考慮に入れた場合、その感情が切実であればある程、そう簡単に言葉が出て来なかったゆえに、下書きをせざるを得なかったのではなかろうか。勿論、ドン・ファンもどきの戦略めいたことを日記に書き留めてみたり、また、「臆病で内気な自分」を自覚していた彼は、少しでも、「自分」を理解して貰えるようあれこれと文章を工夫したりしたこともあるであろう（デル・リット氏の言う「説得力がある」手紙というのは、こうしたことを指すのであろうか？）。しかし、決してヴァルモンにはなれなかった彼の場合、相手を怒らせる不安がペンを止めることも多かったのではないか。いずれ、マチルドへ宛てた手紙について論じる際に、詳しく触れたいと思うが、愛の手紙を書くのに念入りな下書きをしたという事実は、寧ろ、ベールがそれだけ強い感情に囚われていたことを、そして、同時に不器用な恋人であったことを示しているのではないかと思う。

«Alexandrine» ——ピエール・ダリュ伯爵夫人。あるいは、マリ、レディZ等々、ベールが彼女に恋していた1809年から1812年にかけてのスタンダールの日記を読もうとすれば、彼女の「変名辞典」が必要になる程、ベールが数多くの偽名で呼んだ女性である。『恋愛書簡』に収められた手紙は三通、そのうち、「アンリからアレクサンドリーヌへ」と題されたものは一通のみ、手紙としてではなく、彼の日記の中に残されていたものである。他方、「アレクサンドリーヌからアンリへ」の手紙は二通。いずれも、プレイヤッド版の『書簡集』では、その編纂過程で発見された«LETTRES RETROUVEES»として第三巻に収録されている。この二通の手紙を初めて公表したのはフランソワ・ミシェルであったが、公表された1955年当時、ミシェル自身がオリジナルの手紙を所有していた³⁰⁾。二通のうち、最初の手紙は1813年8月18日付、二通目は1814年10月2日付である。つまり、ベールが彼女への恋を熱心に日記に書き綴っていた時期に書かれたものではない。

ところで、プレイヤッド版には、『恋愛書簡』にはない四通のピエール・ダリュ伯爵夫人宛の手紙が収録されている。そのうち、三通はロシア戦線の最中に書かれたもので、『ロシア戦役：アンリ・ベール——またの名をスタンダール——の足跡を辿って』に拠れば、現在も真筆の手紙がモスクワの文書館（Arkhir）に保管されている³¹⁾。また、同書には、この三通の手紙のコピーの写真相が掲載されており、プレイヤッド版編纂時に原本のコピーに基づいて自筆原稿との照合が行われたにも拘わらず、尚、同版のテキストに複数の間違いが在ったことが指摘されている³²⁾。この戦地で書かれた三通の手紙は、それぞれ、1812年の10月16日付、同年の11月7日付、同じく11月10日付となっている。内容は、たとえば、伯爵夫人本人やその家族・知人への気遣いやことづつて、夫人の夫であり、ベールの上司兼庇護者でもあるダリュ伯爵の近況、そして何より、戦地での困難な生活、戦場の様子である。特に、モスクワからスモレンスクへの移動の行程を語った

11月7日付の手紙は深刻であり、後年、描かれることになる『パルムの僧院』の中のフランス軍の潰走の場面を彷彿させる³³⁾。また、残りの一通は、これもプレイヤッド版第三巻の«LETTRES RETROUVEES»所収で、やはり、真筆の手紙がダリュ家古文書の中に紛れていたようだ³⁴⁾。こちらは、1813年9月22日付、発信地はコモ湖畔のトレメツイーナ。ベールは、同じ年のドイツ戦役で病気を患った後、休暇を得て、ミラノで療養しながらアンジェラとの逢瀬を重ねていた。手紙に書かれているのは、滞在中の土地の気候、風景、今後の身の振り方等である。つまり、四通とも、愛のディスクールといったものではない。

同じく『恋愛書簡』にはないが、プレイヤッド版に収められているダリュ伯爵夫人からスタンダール宛てた手紙としては、1810年6月17日付の短信(un billet)がある。これは、プレイヤッド版の『書簡集』では、やはり、第三巻の«LETTRES RETROUVEES»に収録されている。しかるに、この手紙は、本来は、この項目の最初で触れた『恋愛書簡』の中の「アンリからアレクサンドリーヌへ」と題されたもの同様、日記の中にベールが書き写しておいたものだった。デル・リット氏が編纂したプレイヤッド新版の『私的作品集』の中の『日記』の注に拠れば、問題となっている短信を含む1810年6月18日付の日記の前半部分は、シャンピオン版の中で手稿を複製する形で公表されたのが最初のようなのだ。そして、シャンピオン版の説明文には、その手稿は「個人蔵」となっていた。しかし、プレイヤッド新版の『日記』を編纂した時点では、手稿の行方は不明だったと思われる。ちなみにこの短信は夕食への招待状で³⁵⁾、日記ではその後が続いて、夕食時のアレクサンドリーヌやZ氏(ピエール・ダリュ。)の態度や反応が書き留められている。「満足な一日。繰り返すが、パルフィ夫人[M^{me} Palfy = ダリュ伯爵夫人の変名のひとつ。]は、私ととても良い雰囲気だった。ひと月ほど前、一番季節の良い頃に、同じ場所でそうであったように³⁶⁾。」しかし、いくらベールがこのように書き綴っても、彼女が彼宛てた短信は、丁重な招待状以外のなにものでもない。

それでは、デル・リット氏が、こうした手紙を『恋愛書簡』から外したのは、「愛の手紙」とは呼べない内容だったからなのだろうか。しかし、そういった意味で言うなら、氏が収録した二通の「アレクサンドリーヌからアンリへ」の手紙もまた、決してラヴレターではない。親しみを込めた言い回しや、心の籠もった気遣いは見られるものの、彼女の残した手紙は、夫の親戚であり、被保護者でもあるベール宛てた手紙としては、極めて良識的なものと言える。既に述べたように、これらの手紙が書かれた頃には、ベールが彼女へのアプローチを続けていた形跡はないから、フランソワ・ミシェルが書いているように「周囲の非難を受けるところのない、愛情深い近親者³⁷⁾」の関係になっていたのかも知れない。とはいえ——と、ミシェルは続けるのだが、ダリュ伯爵夫人が、1813年8月18日付の手紙では戦争による夫の不在を嘆き、二通目の手紙では、所領地での夫との静かな生活への喜びを表現しているのは、かつての不器用な崇拜者への予防線ではないのか³⁸⁾。

ミシエルのこうした推測が的を得ているのかどうか、判断が難しいところだが、そこで、もう一度、この「恋」がどのようなものであったかを思い起こしてみたい。『恋愛書簡』所収の唯一の「アンリからアレクサンドリーヌへ」の手紙は、前述のように、日記に残されていたもので、

1811年6月24日付になっている³⁹⁾。これは、ベールが彼女への「恋」に最も夢中になっていた時期と言えるだろう。ところで、この手紙(日記の一部と言うべきか?)の出所だが、デル・リット氏編纂のプレイヤッド版の『日記』の注釈に拠ると、1810年5月9日付の「*A tour to Versailles*」というタイトルのついた部分から、1811年の前半までのスタンダールの日記の手稿は、エドゥワール・シャンピオンが所有していたはずだった。しかるに、これも、プレイヤッド新版編纂当時には行方が分からなかった。従って、同版のこの期間の『日記』は、一部、自筆原稿が別のルートで入手された部分を除いて、シャンピオン版からの再録となっている⁴⁰⁾。

さて、これも繰り返しになるが、ピエール・ダリュは、若いベールにとって親戚であり、ナポレオン軍の経理将校としての地位を与えてくれた言わば恩人であった。ベールと同年とはいえ、アレクサンドリーヌはその恩人の妻である⁴¹⁾。しかし、それでも彼は恋をしていた。そして、彼が度々「*le terrible Z*」と日記の中で呼んでいる彼女の夫に悟られぬよう、深謀遠慮の限りを尽くして恋が成就する日を夢見る。彼が、日記の中で伯爵夫人に無数の変名を与えていることには既に触れたが、そうした行為もまた、彼のアリバイ工作(?)のひとつと考えられなくもない⁴²⁾。『恋愛書簡』に収められた「アンリからアレクサンドリーヌへ」の手紙に話を戻すと、この手紙は、彼女への「恋の告白」の手紙である。少なくともベールはそのつもりであった。そして、周囲に気取られぬようにするために、夢見る女子学生的な発想で考えればロマンチックと言えなくもない、しかし、冷静な第三者の目から見ればなんと奇妙な演出を試みる。つまり、書簡体小説の中の手紙の一通であるかのような偽装を施し、本(デル・リット氏は、おそらく *Lettres persanes* ではなかったか、と解説の中で推測している⁴³⁾)の表紙に貼りつけて、伯爵夫人に渡したらしい⁴⁴⁾。手紙の日付から約二週間後の7月5日の日記にその後の事の顛末が報告されている⁴⁵⁾。私がお渡しした本の第一巻の表紙に貼りつけてあったものをお読みになってはおられないのでしょうか、と問うベールに対して、伯爵夫人の答えは「あら! なにかありましたの? なにか特別なものがありました? 帰ったら読むとお約束しますわ⁴⁶⁾。」云々。ベールは、夫人の反応があまりに自然で、しかも大きな声で話すので、小間使いに聞かれるのを恐れ、その表紙に添付したものが自分の書いた手紙である、と夫人に囁くことが出来ない。更に、帰宅途中の馬車の中で、夫人は、ベールが彼女に宛てた手紙(問題となっている「告白の手紙」)のことを仄めかしたのか、別の手紙を指していたのかは不明である。あるいは、ベールを牽制するために、夫人は故意にどの手紙か明確にしなかったのかも知れない。)をその前日、夫であるダリュ氏が読んだこと、夫は彼女が受け取る全ての手紙に目を通すのだ、と繰り返したようだ。こうして、彼の芝居があった努力は夫人の現実的な対応の前にさらりと交わされて空回りをする。

そもそも、ベールが彼女に恋していた1809年から1812年にかけてのスタンダールの日記を読んでいると、(いささか論文用語から逸脱して恐縮だが) すごく気持ちが悪い。(また、こうした表現も男性諸氏には大変失礼だが) モテないけれど自意識過剰のパソコンおたくのおにいさんの内面を、なにかの間違いで覗いてしまったような気持ちの悪さと言ったら、ご想像頂けるであろうか。先ず、現実起こっていることを書いているのか、それとも彼の思い込みに過ぎないのか⁴⁷⁾、その境界線が極めて曖昧であり、しかも、日記に綴っていた当時のスタンダール自身、どこまで

自分のしていることに自覚があったのか分からないからである⁴⁸⁾。恋しいひとのちょっとした親切や笑顔に一喜一憂する気持ちは十分理解出来るが、しかし、ベールの視線は、単にアレクサンドリーヌひとりにとどまらず、ベールが常にその目を気にしていた「le terrible Z」、つまり、彼女の夫を経由して彼自身に戻ってくる。「3月19日。月曜日。——私は「le terrible Z」に対して、初めて愛想良く振る舞えた⁴⁹⁾。」「1810年4月18日。[.....] 幸福な、いや、幸福過ぎる一日だった。「le terrible Z」の前で、二時間続けて私が才気煥発でいられたのは、私の人生で初めてのことである⁵⁰⁾。」ここまでくれば私ならずとも、かの有名なルネ・ジラルが提唱するところの「le désir triangulaire」を思い起こされるであろう。そして、ミシェル・クルーゼは書く。「[貴婦人の寵臣となることで] 彼は、偉大で恐るべき縁者のライヴァルになれる。彼は、この報復を成すために、つまり、恐れられ憎まれた庇護者に勝利を収めるためにのみ、恋したのではないか⁵¹⁾。」劣等感と背中合わせのナルシスム。愛されたい、「望まれたいという欲望は、望まれる資質を備えた同性への欲望となって表現される⁵²⁾。」フィリップ・ベルティエ氏の言われる「スタンダールの内なる、そして潜在的なホモ・セクシュアリテ」のテーマである。

デル・リット氏は『恋愛書簡』の解説の中で「彼が恋に、それも情熱的恋愛 (l'amour passion) に恋していたのだ⁵³⁾。」と断言している。クルーゼもまた、ベールが「最も奇妙な恋愛「小説」を生きていた⁵⁴⁾。」と書いている。つまり、彼が、日毎、夫人に会う一方で綴り続けた「日記」は、「日記」ではなく、既に一篇の小説だったのだ。デル・リット氏が、その「恋愛小説」の中に残された文章の一部を「アンリからアレクサンドリーヌへ」と題して、ベールからダリュ伯爵夫人宛の手紙として『恋愛書簡』に収録したのは、残りの二通の夫人の手紙と並べて提示することで、この「恋愛の物語」の持つ特色を浮かび上がらせたかったからではないか。小説の中の挿話のような行為を正気(?)で演じるベールの手紙に対して、理性的で常識的な伯爵夫人の手紙は、幻想と現実が交錯する一種の「狂気 (la folie)⁵⁵⁾」じみた世界から、読者を我に立ち返らせてくれる安定剤のような役割を果たしているように思える。

とはいえ、アンリとアレクサンドリーヌの関係をありのままに読者に示すには、全ての手紙を収めた方が良かったようにも思う。あるいは、編集上、ページ数の都合でもあったのであろうか。それとも、やはり、恋愛書簡集にロシア戦線は馴染まないからなのか。

« Angéline » —— オペラ・ブッフの歌手、アンジェリーヌ・ベレーテル。ダリュ伯爵夫人をヒロインにした「恋愛小説」を書き綴る一方、ベールは、この女性を口説くためにせつせとラヴレターを書き送っていたらしい。残念ながら、こうした手紙は散逸してしまっているが⁵⁶⁾、『恋愛書簡』には、これもロシア戦役の途中で書かれた「アンリからアンジェリーヌへ」の手紙が二通、収められている。最初の手紙が1812年10月15日付、二通目は同年の11月7日付である。つまり、先に触れたプレイヤット版所収の三通のピエール・ダリュ伯爵夫人宛の手紙と同時期に書かれたものである。同版の注釈に拠れば、いずれも自筆の手紙が、モスクワの ZGADA (Archives Centrales Gouvernementales des Actes Anciens) に保管されており、コピーによって、原本との照合もなされていた⁵⁷⁾。しかし、『ロシア戦役：アンリ・ベール——またの名をスタンダール——の足跡を辿って』に拠ると、現在もモスクワの文書館に保管されているのは、1812年10月15

日付の手紙のみである⁵⁸⁾。ダリュ伯爵夫人宛の手紙とは異なり、アンジェリーヌに書かれた手紙では、愛の言葉が繰り返され、ベールは戦地で彼女の手紙を待ちわびている。また、今もモスクワに保管されているという10月15日付の手紙は、イタリア語で書かれたものだ。デル・リット氏は、この事実に注目して、次のように述べている。アレクサンドリーヌが高貴な女性であり、ベールの夢想から生まれた「情熱的恋愛小説」のヒロインなら、アンジェリーヌはお手軽な恋の相手と見られがちである。しかし、ベールが戦場から彼女に手紙を送っていること、また、オペラを介してイタリア語が恋人たちだけの言葉であったことは、ふたりの間に優しい愛情が通い合っていた証ではないか⁵⁹⁾。更に、鈴木昭一郎氏が指摘するように、彼女は、短期間とはいえ、ベールが同棲したことのあるただひとりの女性としても、注目されるに値する存在であると思う⁶⁰⁾。

« Matilde » ——生涯を通じて、アンリ・ベールには「不幸な恋愛⁶¹⁾」が多い。そして、「恋」の喪失が彼に「死」への衝動をもたらしたことも少なくはない⁶²⁾。『エゴチスムの回想』の第一章に描かれたマチルド・デンボウスキーとの別れの場面は簡潔である⁶³⁾。そして、その簡潔さが全てを物語る。ベールは、生涯、「マチルド」が彼を愛さなかったという事実を（あるいは、理性では理解していたのかも知れないが）認めることが出来なかった。既にアレクサンドリーヌへの恋は、後に生まれるさまざまな作品を予感させる文章をベールに書かせたが、「マチルド」の喪失は、『恋愛論』ばかりでなく、小説家スタンダールの誕生をも促した⁶⁴⁾。

『恋愛書簡』のこの章に収められた手紙は十通。十通とも「アンリからマチルドへ」の手紙である。うち、四通はスタンダールの下書きが現在もグルノーブルの市立図書館に保管されており、四通とも、クロゼの遺族から寄贈された『合本(一)』の第一巻の中に含まれている⁶⁵⁾。この四通は、プレイヤッド版では、その編纂時に既に、このグルノーブル図書館にある自筆の下書きとの照合がなされた印がついており、1818年10月4日付の手紙を除く三通については、ヴァリアント等についての詳細な注釈も添えられている⁶⁶⁾。他方、『恋愛書簡』では十通目に当たる1821年1月3日に発送された手紙は、プレイヤッド版の注に拠ると、ベールが所有していた本の一冊に残された下書きであり、この版が編纂された当時は、ドゥセ図書館(Bibliothèque Doucet)の所蔵となっていた⁶⁷⁾。更に、1819年7月20日付の手紙は、(これもプレイヤッド版の注に拠るが)スタンダールの下書きと思われる原本の複製が、1958年7月25日発行の *Bulletin Pierre Bérès* の第三号に掲載され、そのファクシミリ版を元に原文との確認作業が行われたようだ⁶⁸⁾。残りの四通は、いずれもプレイヤッド版を編纂した時点では、ロマン・コロンが出版した『未発表書簡集』からの再録である。ただし、この四通のうち、『恋愛書簡』所収の二通目、1818年11月16日付の手紙を除外した三通と、既に触れた *Bulletin Pierre Bérès* に複製が掲載された手紙の合わせて四通の下書きについては、プレイヤッド版に詳しい解説がある。これらの四通の手紙は——最初の一通は1819年6月7日付、次の手紙は同年の6月11日付、更に6月30日付、7月20日付と続くが、言うまでもなく、かのヴォルテラの事件を巡って書かれたものである。1961年の終わりに、このマチルドへの四通の手紙の下書きを含む四つ折り版で74ページのノートが売りに出され、個人のコレクターの手に渡った。このノートの最初のページの複製は、1961年9月25日発行の

Bulletin Pierre Bérès の第四十一号に掲載されたのだが、スタンダールの手で「Love Letters 1819」と書かれ、その下に二行に渡って「Je la regretterai toute ma vie, si je ne la lui consacre pas toute entière.」とつけ加えられている。プレイヤッド版の編者は、1958年にこのノートを見る機会を得たが、詳しい研究や原本の照合等は許可されなかった。その結果、自筆の原稿とロンが出版した『未発表書簡集』のテキストには、かなりの違いがあると分かったにも拘わらず、プレイヤッド版の編纂時には6月11日付の手紙にわずかな修正を加えることしか出来なかった。前出の *Bulletin Pierre Bérès* の第四十一号に、問題となっているノートの最初のページの複製と同時につけられたコメントに拠れば、それぞれの手紙に無数の修正や加筆が加えられており、筆跡が乱れる程の強い動揺に見舞われながら、スタンダールがこれらの手紙をどれほどの思いで綴ったのかが伺われたようだ⁶⁹⁾。尚、人文書院の『恋愛書簡』が発行されたのは1977年だが、その時点においても——プレイヤッド版の第三巻が出版されて十年弱の年月を経過した時点でも、この貴重な資料は未検討のまま残されていたらしい⁷⁰⁾。

この他、プレイヤッド版にはもう一通、ベールからマチルドに宛てた手紙が収録されている。この手紙は、同版の注では、マルチノーが編纂したディヴァン版の『書簡集』からの再録であり、なんらかのオリジナル原稿との照合がなされた印もついていないし、また、そうした原本の存在も明記されていなかった⁷¹⁾。しかし、(その後、どのような経過を経たのかは分からないが) グルノーブル市立図書館のカタログに拠れば、これも、部分稿 (le fragment) が、クロゼの遺族が寄贈した『合本 (一)』の第二巻に含まれており、対応するプレイヤッド版のページも掲載されている⁷²⁾。デル・リット氏がこの手紙を『恋愛書簡』から外したのはなぜなのだろうか。日付が明確でないからなのか、それとも手紙の最初も終わりも途切れていて断片的に過ぎたからであろうか。

他方、既に触れたように、『恋愛書簡』には「マチルドからアンリへ」の手紙は、一通も収録されていない。デル・リット氏が、その解説の中で、ヴォルテラの事件の折、彼女がベールに書いたという短信を引用しているのみである。「私は、あなたがこれ程までに慎みを欠いているとは、私の評判を傷つけようとするとは、思いもませんでした⁷³⁾。」また、プレイヤッド版にも、マチルドの手紙は一通も収められていない。しかし、マチルドの手紙が他に全く存在しなかった訳でもないようだ。1819年6月11日付の手紙の下書きの余白にベールが残したメモに拠ると、彼女は、文末に6月26日の日付の入った「14ページの返事」を彼に宛てて書いている⁷⁴⁾。一方、同年の8月15日付のグルノーブルで書かれたベールの手紙の冒頭には、彼が「三日前に」彼女の手紙を受け取ったことが記されている⁷⁵⁾。こうした手紙は、なぜ、失われてしまったのだろうか。

いづれにしても、デル・リット氏が書いているように、ヴォルテラの事件以降、マチルドの家への出入りを半ば禁じられたベールにとって、手紙は残された唯一のコミュニケーションの手段であったのだと思う⁷⁶⁾。『恋愛書簡』所収の最後の「アンリからマチルドへ」の手紙は、1821年1月3日に発送されたものだが、その中で、ベールは、せめて一晩、十五分ばかりの訪問を許してくれないか、と哀願している。「無遠慮 (indiscret) なことはいたしません。あなたに話しかけたりするつもりもありません。愛想よく振る舞います⁷⁷⁾。」こう書いた彼の頭の中には、事件

から一年半の時が過ぎても尚、マチルドの「これ程までに慎みを欠いているとは思いませんでした。」という言葉が残っていたのであろうか。同時期の彼の日記（デル・リット氏編纂のプレイヤッド新版のいわゆる「再構成された日記（le *Journal* «reconstitué»）」だが⁷⁸⁾）には、以下のような文章が散見する。「1月2日に彼女に会うつもりだ。1821年の最初の日、何度か彼女を訪ねたが無駄だった⁷⁹⁾。」「1821年1月1日読み終える。明日、レオノール〔マチルドの変名のひとつ〕に会うつもりだ。本を読みながら、彼女のことを考えている⁸⁰⁾。」「明日、レオノールに会いに行く⁸¹⁾。」「1821年1月12日。今日、彼女に会えると思っていた。多分、明日は⁸²⁾。」この「明日」はいつ来たのであろうか。

«Alexandrine»の項で、スタンダールのナルシシズムに関して、私はいささか意地の悪い書き方をした。マチルドの場合においても、「マチルドが自分を愛さない」という事実を受入れられない彼の視線は、愛される資質を備えていない自分、理解されない自分に向けられがちである⁸³⁾。そして、思いのままにならぬ苛酷な現実と夢のはざまで、必死の自己弁護を試みる。こうした彼の態度が、夫との離婚問題を抱えて奔走し、疲れ果て、また、周囲の非難や噂話に悩まされていたマチルドを苛立たせたことは、想像に難くない⁸⁴⁾。だが、『恋愛書簡』に収められた十通の「アンリからマチルドへ」の手紙——特に、ヴォルテラの事件の前後に書かれた四通の手紙においては、こうしたベールの「愛されない自分」に対する視線は、アレクサンドリーヌをヒロインに書かれた「恋愛小説」には見られなかった深刻な自虐性を帯びてくる。1819年5月12日付の手紙の下書きより：「私は自分自身を嫌悪しています。もし、私が最低の人間でないのなら、昨日、あなたが発する前に、決定的な説明を求め、どうしたらよいのかははっきりと見るべきではなかったのでしょうか⁸⁵⁾。」あるいは、「あなたの前では、私は子供のよう臆病で、言葉は口の端から消えて行き、ただ、あなたを見つめ、賛美することしか出来ません。私は、こんなにも自分以下の、くだらない男でなければならないのでしょうか⁸⁶⁾。」そして、この文章を受けて、ベールは余白に次のようなメモを残す。「これが、この男の本来の姿だ⁸⁷⁾。」あるいは、ヴォルテラの事件の最中に書かれた1819年6月7日付の手紙から：「恋をした途端、私は臆病になってしまいます。そうしたことは、私があるあなたのお側にいる時の私のうろたえた様子からお察しいただけると思います⁸⁸⁾。」「崇高なるマチルド、もしそれがお心にかなうのなら、私を愛してください。ですが、後生ですから、私を軽蔑しないで下さい。その苦痛に私は耐えきれません⁸⁹⁾。」そして、同年6月11日付の手紙の中で、ベールは、ヴォルテラの事件の経緯を順を追って述べながら、セルチ門の近く、マチルドの散歩コースで「偶然（par hasard）」出会ったことに関して釈明している。「城門を出て右に行かなかったのは、偶然のことだったのです。[.....]私は、心静かに、よく考えたいと思っていたのです。こうして、私はあの草原に出た。そこへ、後からあなたがお見えになったのです。私は、胸壁に寄りかかって、そこで、二時間、海を見つめていました。私をあなたの側に運んだ海、その海の中でいっそ死んでしまった方が良かった⁹⁰⁾。」こうした自虐性は、後年、スタンダールの主人公に受け継がれる。『赤と黒』第二部、第二十八章、ジュリアンは、マチルドの心を取り戻すべく、友人の忠告に従って、別の女性に手紙を送り続ける。自殺への衝動に駆られながらも、「翌朝、ドレスの袖と手袋の合間にマチルドの腕を垣間見

ると、それだけでこの若い哲学者〔ジュリアン〕は、残酷な思い出に浸ってしまい、しかし、それがゆえに、生への愛着が蘇るのだった⁹¹⁾。」そして、彼は、ひとときの和解を夢想して、その一日がもたらすであろう幸福に絶句する。しかし、理性が彼を現実に戻す。「あの性格で、彼女が俺にどんな保証を与えてくれるというのだ？ ああ、全て俺の取り柄のなさゆえだ。俺は、優雅な振る舞いなど出来はしないし、話し方ももたもたしていて単調なままだろう⁹²⁾。ああ！なぜ、俺は俺なんだ？⁹³⁾。」

この拙文の最初の方で、私は、一般論として愛の手紙が「説得力のあるもの (convaincante)」である必要があるのかどうか、疑問を提示したが、ことヴォルテラの事件を巡る手紙に関する限りは、ベールは、マチルドの自分に対する非難——「私は、あなたがこれ程までに慎みを欠いているとは、私の評判を傷つけようとするとは、思いもありませんでした。」という非難、あるいは、「彼女の家は無理やり押しかけた。」という非難、そして、「(おそらく度重なる彼女の叱責にも拘わらず、手紙を) 厚かましくも (oser) 書いて寄越した。」という非難——そうした非難が不当であると、さまざまな説明を用いて、まさに彼女を必死で「説得 (convaincre)」しようとしているのだ。彼は、「事件」に関して自分が無実であることを証明する以上に、「マチルド」の望む行動の取れない「自分」を理解して欲しかったのであろう。だが、彼の論理に拠れば彼の行動の全てを自明のものとしてくれる「情熱 (la passion)」「感じやすい心の持ち主 (les âmes tendres)」「マチルドに会いたくてたまらないという欲求、あるいは、彼女に会う幸福」といった理由は、彼女の目には免罪符としては映らない。やがて、父親の訃報に故郷に帰った彼は、全ての釈明が無駄であると悟ったのであろうか、8月15日付の手紙の末尾にこう記す。「さようなら。どうかお幸せに。私が思うに、あなたはひとを愛していなければ、幸福にはなれない方です。どうか幸せになって下さい。たとえ、私以外の男性を愛することによってでも⁹⁴⁾。」全てを諦めたかのような寛容なこころの証のように見えるこの言葉の向こうには、しかし、尚、諦め切れぬベールの思いが窺える。同じ手紙の余白に残されたメモ：「彼女は何を望んでいるのか？ 熱烈に (ardemment) 愛されることだ⁹⁵⁾。」「情熱的に愛されること」を望んだのはベールではなかったのか。彼は「マチルド」に何を求めていたのだろうか。

スタンダールは、マチルドに宛てた手紙の下書きを二十年以上もの間、大切に保管していた。勿論、1880年に読まれることを期待して、自分が書いたものを残しておきたかったのかも知れない。また、エゴチストたる彼にとって、ものを書くことは自己の探究の一部であり、失うことの出来ない記録であったろう。しかし、この『恋愛書簡』に収められた手紙を通して、彼の「恋」の軌跡を辿っていると、彼がそうした下書きを取っておいたという事実は、彼の作家としての自意識ばかりでなく、失われたものへの執着——なくした「恋」、なくした「マチルド」、そして、彼が「恋愛」を通して、絶えず求めていたなにかへの執着を物語っているような気がしてならない。

« Clémentine » —— とかく処分されがちな愛の手紙。プレイヤッド版『書簡集』の第二巻の序文に拠れば、「マンチ——クレマンチヌ・キュリアル の 282 通の手紙が、灰となった⁹⁶⁾。」処分したのは、スタンダールの死後、彼の残した多くの草稿を受け継ぐとこのロマン・コロ

ンである。コロンは、これらの手紙がベールとかつての恋人の評判を傷つける (compromettantes) と判断した⁹⁷⁾。残念なことではあるが、それでも、『恋愛書簡』には、「アンリからクレマンチヌへ」の手紙が七通、「クレマンチヌからアンリ」への手紙が十一通収められている。プレイヤッド版の注に拠れば、「アンリからクレマンチヌへ」の七通の手紙は、全て、コロンの『未発表書簡集』からの再録である。ただし、手紙の配列の順序については、コロンの版とプレイヤッド版ではかなりの違いがある。『恋愛書簡』は、プレイヤッド版に準じているが、『恋愛書簡』では、スタンダールの手紙としては三通目に当たる手紙——1824年に書かれたと思われる、冒頭に「あなたと別れて、二時に家に帰って⁹⁸⁾」と記された手紙以下の五通のスタンダールの手紙が、コロン版では、1825年12月24日付の手紙の後に配置されていたようだ。また、その五通の手紙の順序もプレイヤッド版とは異なっていたらしい。五通のうち四通まで、明確な日付が入っていないために、コロンが混乱したのだろうか⁹⁹⁾。

また、「クレマンチヌからアンリ」への手紙については、1834年8月11日にパリで書かれた手紙の写しが、プレイヤッド版の編纂時には、ヴァチカンの Archivio Segreto に保管されていたとある¹⁰⁰⁾。他の十通の手紙は、オーギュスト・コルディエの『友人や女友達によって語られたスタンダール』(1893)、あるいは、『スタンダールはいかに生きたか』(1906)に発表されたものである¹⁰¹⁾。グルノーブル市立図書館の目録(草稿編)の序文に拠ると、コルディエはコロンの遺族から、残っていたスタンダールの自筆の草稿等を譲られたようである。彼は、その後、そうした資料をカシミール・ストリエンスキーに更に譲渡したが、その際、二巻本の写し、それも殆ど複製に近いほど丁寧な写しを取っておいた¹⁰²⁾。この二巻本は、現在、グルノーブルの市立図書館が所蔵している訳だが、目録を見ると「*Recueil factice des transcriptions sur les originaux réalisé par Auguste Cordier. — Ms. 1889. — Deux volumes de 340 x 233 mm., 124 et 212 p., illustrés de fac-similiés*¹⁰³⁾ . . .」と記載されている。更に、このコルディエの写本の第一巻の中に、次のような項目がある。「P.116-124. — « Autographe n° XXVII ». Troisième Partie. Stendhal raconté par la femme. *Lettres non datées et extraits de lettres datées, de Clémentine Curial à Stendhal*¹⁰⁴⁾ . . .」

確かに、『恋愛書簡』所収の「クレマンチヌからアンリ」への手紙のうち、五通は、一部、手紙の文面を写したと思われる部分もあるが、基本的には、手紙を要約したものである。また、プレイヤッド版には、『恋愛書簡』には収められていない三通のキュリアル伯爵夫人の手紙があるが、このうちの二通もまた、手紙の要約である¹⁰⁵⁾。この要約は誰の手になるものなのだろうか。ベール自身か、それとも、手紙を破棄する前にコロンがしたことなのか。

キュリアル伯爵夫人は、気性の激しい女性だったと伝えられているが、そうした彼女の本質を最も忠実に物語っているのは、1824年7月4日付の手紙であろう¹⁰⁶⁾。手紙の余白に残されたスタンダールのメモに拠れば、「[恋愛関係になって]最初の頃にした喧嘩¹⁰⁷⁾」の最中に書かれたものらしい。プレイヤッド版の注釈には、コルディエが、自分で所有していた真筆の手紙に添えたコメントが載っている。「三枚目の下、右の方、涙の後が筆跡を消しかけている¹⁰⁸⁾。」嫉妬に駆られ、他方、妊娠の不安に苛まれている彼女のこの手紙には、理性も理屈もあつたものではな

い。だが、この目茶苦茶さ加減こそが、愛のディスクールの本領だという気がするのだが、この手紙を受け取ったスタンダールはどのような反応を示したのだろうか。怒ったのか、喜んだのか、どうやって彼女をなだめようか考え込んだのか、それとも、面倒くさいと思ったか？

« Giulia » ——ジウリア・リニエリの章は、ベールが彼女の後見人であるダニエロ・ベルリングエーリに宛てた手紙から始まる。求婚の手紙である。1830年の政変で外交官の職を得たベールは、既に恋愛関係にあったジウリアに正式に結婚を申し込んだ。プレイヤッド版の注に拠ると、この手紙は、フェルディナンド・マルティエニによって *L'Illustrazione Italiana* の1930年10月1日号に発表され、また、同年発行のフェルディナン・ボワイエ著『ジウリアあるいは、スタンダールの実現されなかった結婚』にも掲載されたものらしい¹⁰⁹⁾。ベールのこの手紙は1830年11月6日付だが、彼の求婚に対して、ベルリングエーリは翌11月7日付の返信で、丁重に断りの返事をしている。ベルリングエーリの手紙は「[彼の] 母国語 [即ち、イタリア語] で書かれている¹¹⁰⁾」のだが、1934年にその著作の中で、初めてこの手紙を公表したルイジ・フォスコロ・ベネデットは、フランス語訳しか載せていない、とプレイヤッド版の注に述べられている¹¹¹⁾。その後もふたりの交際は続いたが、1833年の4月、ジウリアはベールに、結婚を考えている相手がいることを仄めかす手紙を送る¹¹²⁾。彼が、『恋愛論』のギリテ本の余白に書き込んだメモの中で、「ピエトラサンタの致命的な手紙¹¹³⁾」と呼んだ有名な手紙である。この手紙は、アンリ・マルチノー編纂の『スタンダールの 174通の手紙』からプレイヤッド版に再録された¹¹⁴⁾。グルノーブル市立図書館の目録（草稿編）の序文に拠れば、ロマン・コロンの子孫が、手元に残っていたスタンダールへの手紙をマルチノーに譲り渡した。これらの手紙は、スタンダールの知人、友人によって1810年から1842年に書かれたもので、マルチノーは1947年に『スタンダールの 174通の手紙』として出版した。しかし、残念なことに、オリジナルの手紙は、出版後、散逸してしまったらしい¹¹⁵⁾。「ピエトラサンタの致命的な手紙」と、『恋愛書簡』に収められた残る二通の「ジウリアからアンリへ」の手紙も、こうした手紙の中に含まれていたようだ¹¹⁶⁾。

他方、『恋愛書簡』に収録されている「アンリからジウリアへ」の手紙は一通のみ、「ピエトラサンタの致命的な手紙」への返信である。この手紙のオリジナルは、アドルフ・ポプがスタンダールの『書簡集』を編纂した時点では、ストリエンスキーのコレクションの中にあつた、とプレイヤッド版の注釈に記されている¹¹⁷⁾。その後、1950年に自筆の下書きを所有していたフランソワ・ミシェルが、その下書きに忠実にコロンの版のテキストに修正を加える形で、この手紙を「シエナの恋」の中で再現した¹¹⁸⁾。しかし、プレイヤッド版のテキストとミシェルのテキストには、数箇所違いが見られ¹¹⁹⁾、また、プレイヤッド版には、なんらかの自筆原稿との照合が行われた印はついていない。プレイヤッド版のテキストは、ポプの版のテキストを再録したものであろうか。尚、『恋愛書簡』のテキストは、プレイヤッド版に準じているようだ¹²⁰⁾。

ジウリアは1833年6月に結婚するが、スタンダールとの関係は、彼が脳卒中の発作を起こし、病後の休暇を得て、チヴィタヴェッキアを去る直前まで続いていたものと推測されている¹²¹⁾。

« Dernière velléité de mariage » ——『恋愛書簡』の第一部« DANS LA VIE »を締め括るのは、ベールが未亡人となったラキエ男爵夫人に宛てた求婚の手紙である。この手紙は、コロ

版の『書簡集』からプレイヤッド版に再録されており、同版の注に拠ると、コロンは、ベールが残した下書きを元にしたらしい。ただし、手紙の日付はコロン版では、1837年7月11日となっていた。プレイヤッド版（及び、『恋愛書簡』）の1836年10月という日付は、前出の「シエナの恋」の中でミシェルが提唱した日付である¹²²）。しかし、『恋愛書簡』のこの章のデル・リット氏の解説に拠れば、スタンダールはこの手紙を投函しなかったらしい。というのは、彼が求婚を考えた矢先、未亡人はメリメの縁者に当たるレオノール・フレネルと結婚したからである¹²³）。結局、スタンダールは生涯を独身のままで過ごすことになる訳だが、その点に関して、デル・リット氏は書く。「彼はそれを後悔しなかったであろう¹²⁴。」

*

冒頭に引用した『パルムの僧院』の結末に話を戻そう。バルザックは、有名な『ベール氏論』の中で、この小説の結末に触れ、「タイトルにも拘わらず、モスカ伯爵と伯爵夫人がパルムに戻り、ファブリスが大司教になるところで、この作品は終わっているのである¹²⁵。」と書いている。それに対して、スタンダールは、バルザックへの返信の三つの下書きのうちのひとつで、「私は、サンドリーノの死を頭において、『パルムの僧院』を書きました。その性格上、私の心を強く動かした出来事だったからです。デュポン氏〔『パルムの僧院』を出版した書店の店主。〕は、私から彼の死を描く場所を取上げてしまったのです¹²⁶。」と反論している。また、セルクル・デュ・ビブリアフィル版に掲載されているシャペール本に残されたスタンダールのメモの中には、デュポン氏が作品が長くなるのを嫌ったために、結末に近い部分の何箇所かを削除したり、短くまとめざるを得なかった、という作家のはやきが散見される。そして、第二版刊行の際には、そうした箇所に手を加えたいという希望も、同時に述べられている¹²⁷）。もし、スタンダールが書き残したように、第二版を出版する機会に恵まれていたら、『パルムの僧院』の結末は、もっと違った形になっていたのだろうか。

中川久定氏は『パルムの僧院』を扱った論文の中で、モスカ伯爵がひとり生き残って、巨万の富を集めていることについて、「サンセヴェリーナがすでに断定していたように、モスカは決して「悪人」ではなかったけれども、そのどこかに「卑俗な魂」をもっていたのであろうか¹²⁸。」と疑問を投げかけておられる。また、下川茂氏は、「鳥のモチーフ」という観点からこの小説を分析し、ファブリス、クレリア、ジーナが鳥であり、同時に天使であるのに対して、決して「鳥」に譬えられることのないモスカを「失墜した（あるいは墮落した）鳥」と呼んでいる¹²⁹）。確かに、ファブリスの判決を巡ってのエピソードにおいては、モスカの「廷臣としての本能」が、「自分でもそうとは気づかぬうちに、恋人の利益よりも主君の利益を優先させてしまい」、その結果、ファブリスはファルネーゼ塔に幽閉されてしまった¹³⁰）。『パルムの僧院』のテキストを検討している限りにおいては、こうした見解を否定する根拠は何も出て来ないのだ。

だが... と私は思う。1841年6月19日付のロマン・コロンに宛てた手紙の中でベールは次のように書いている。「私は二匹、犬を飼っている。私はその二匹をやさしく可愛がっている。」そし

て、二匹の犬の種類や性質を描写した後、彼はこうつけ加える。「私は、愛するものがなにもなくて淋しかった¹³¹⁾。」最愛のサンセヴェリーナや、彼女のために息子同様に愛してきたファブリスに先立たれ、ひとり取り残されたモスカ伯爵。そうしたモスカの姿に、孤独な作家の姿が重なって見えてしまうのは私の感傷であろうか。

*

『アンリ・ブリュエールの生涯』の終章となった第四十六章で¹³²⁾、スタンダールは次のように書いている。「私に生きるべく残された五年、十年、二十年、あるいは三十年をひどい苦痛のうちに過ごすことになったとしても、私は、死ぬときになって、『もう一度繰り返したくはない。』とは言わないであろう¹³³⁾。」だが、その一方で、彼は、既に1805年1月18日付の日記の中で、「七ヵ月以上前から続いている消耗熱」に苦しみ、その苦しみの中で、送金してくれない父を恨んで、「勉強が、もっと言うなら、あの父にも拘わらず、私の胸のうちに芽生えた栄光に対する欲がなかったなら、私は、五、六度、ピストル自殺をしていただろう。」と記している¹³⁴⁾。また、西川長夫氏は、スタンダールが数多くの遺書を残していることに注目し、彼のこうした「遺書マニア」は、「その作品に表現された幸福感とは反対に、実生活のなかでしばしば生きることの困難に直面し、社会不適應の状態にあったことを示しているだろう¹³⁵⁾。」と述べている。実際、『アンリ・ブリュエールの生涯』は、17歳のペールがミラノで味わったという「狂気じみた完全な幸福の一時期¹³⁶⁾」の物語を予告したまま、中断されている訳だが、三十六年という歳月を経た後も（あるいは、経たからなのか？）、作家の手を震えさせるほどの何があったのであろうか。

現在、定本とされているプレイヤッド版のスタンダールの『日記』は、1801年4月18日からつけ始められている¹³⁷⁾。だが、これといった華々しい記述は見当たらない。ベルガモ一番の美女といわれるノタ夫人。しかし、彼女にはお金持ちの「*un cavaliere servente*」がいて、とても近寄れない¹³⁸⁾。あるいは、女性に対して不器用で、成功せず、社交界でも何か特定の議論の時しかぱっとしない自分¹³⁹⁾。折角の仮装舞踏会や花火も、人が多すぎて半時間で三歩しか進めない¹⁴⁰⁾。その間、断続的に続く熱。治療のためのキニーネや煎じ薬。ただ一度、アンジェラ・ピエトラグリュエの名前が出てくる箇所がある。1801年9月12日付のごく簡単な記述である。「ジョワンヴィル、マリニエ、マゾー、オーギ〔ユスト〕、プチエ、グリユア夫人〔アンジェラのことである。〕、ラ・ガフォリーニ、グリユア、ジレットイ等が、ヴェネチアへ向かう途中、立ち寄る。三台の馬車のひとつに席があったら、私も行ったのだが¹⁴¹⁾。」ペールの席がない——何か当時の彼の立場を象徴的に表しているようだ。

他方、『書簡集』はというと、イタリアから妹のポーリーヌに初めて送られた手紙——1800年6月29日付の手紙の中にイタリアの女性について、次のようなコメントが見られる。「僕が予想だにできなかったことは、この国の女性たちに感じのよい愛想の良さがあることだ。君は信じないかも知れないが、本当に、今、パリへ帰ったら、僕は絶望するであろう¹⁴²⁾。」同年7月、ペールは妹にボロメ島への「割りに快適な旅行¹⁴³⁾」を書き送る。しかし、9月28日付の手紙：「死ぬ

ほど退屈した舞踏会から戻ってきた¹⁴⁴⁾。」12月27日、その前日、ミラノでカーニバルの最初の芝居に行ったベールは、舞台の装飾と衣装の豪華さに魅せられる¹⁴⁵⁾。12月31日、素晴らしい音楽は、毎晩、彼を楽しませているが、「ダンスとはいうと、湿っぽい気候と足に受けたサーベルの傷に苦しめられているので、おとなしく壁の花になっている¹⁴⁶⁾。」1801年2月22日、カーニバルが4日間、延長されて、若い女性が最後の四回の仮装舞踏会を彩る¹⁴⁷⁾。5月9日、ベルガモで遭遇した印象的な雷雨の描写¹⁴⁸⁾。しかし、6月14日付の手紙では、「もし、我々がイタリアに残ることになる場合には、全てが落ち着いたら、休暇を願い出るつもりだ¹⁴⁹⁾。」と書き、父親に頼んだはずの自分の本を早く送ってくれと催促している。「ここには、僕に一行のフランス語も無いのだから¹⁵⁰⁾。」その後、7月22日付の陸軍大臣宛の短い手紙に、11月18日付の手紙が続く。再三の懇願にも拘わらず妹からの手紙が来ないので、「二年前から、僕たちは、互いに見知らぬ者のようになってしまった¹⁵¹⁾。」と嘆く。そして、再び、手紙の催促。更に、土地の寒さがとても厳しいので、頼んだ衣類を送って欲しい、とも書いている¹⁵²⁾。1801年12月6日付の手紙：「僕は、日に何度も君のことを考えている。成長し、美しくなって、教養を身につけ、愛想の良い、誰からも愛されるようになった君に再会するのは嬉しいことだ。そうした心地よい思いが、僕を絶えずグルノーブルに呼び戻す。九ヶ月後には、帰っているつもりだ。隊長が休暇をくれたから、すぐにでも帰れるのだが、連隊における義務ゆえにここに引き止められている¹⁵³⁾。」プイレヤッド版の『書簡集』では、この手紙の次には、約半年後の1802年6月6日付、パリでエドゥワール・ムニエ宛に書かれた手紙が続いている。翌月、ベールは陸軍に辞表を提出することになる。

イタリアからポーリーヌに書かれた手紙が伝えるベールのイメージは、未知の土地の住民や風物への新鮮な驚きや感嘆を素直に表現しながらも、故郷からの便りを待ち焦がれ、やがて、軍隊生活に飽いて行く青年である。そして、彼が恋焦がれたはずのアンジェラのことは、ひとことも触れられていない。彼が妹に宛てた手紙の中で、初めて彼女の名前を挙げるのは、1804年になってからで、その時になって、「[彼女を]言葉では言い尽くせぬほど愛した」ことを告白している¹⁵⁴⁾。また、1808年にもフラカステイとミラノで味わった幸福に触れながら、「ピエトラ・グリユア夫人、彼女は別だ。彼女の思い出はイタリア語の思い出に結びついている¹⁵⁵⁾。」と書いている。そして、伝記作者たちの筆は、「ミラノの神話」「狂気じみた幸福」を語る時、1811年の『イタリア旅行記』の中のベールの有名な告白に飛ぶのだ。「ピ[エトラグリユア]夫人、彼女はルイに愛されていたのだが、その彼女に愛して貰えなかった私は、彼女のために幾つも空中楼阁を思い描き、いつの日か、大佐になって[.....]戻って来ると、その時は、彼女にキスし、そして涙にくれることを想像していた¹⁵⁶⁾。」この彼の夢は、同年のミラノ再訪の折に実現する。そして、その夢の結末は、というと『恋愛書簡』所収の最初の二通の手紙——「Angela」の章に戻ることになる。

果たしてスタンダールは「幸福」だったのだろうか——多分、答えの出ないこの問題について、もう少し考えたら、デル・リット氏の『恋愛書簡』片手に、愛犬たちを引き連れて、無人島へでも行ってみようか。そこで、お昼寝しながら暮らすのが、目下のところの私の夢である。

注

- 1) « [...] Elle[Clélia] ne survécut que de quelques mois à ce fils si chéri, mais elle eut la douceur de mourir dans les bras de son ami. / Fabrice était trop amoureux et trop croyant pour avoir recours au suicide; il espérait retrouver Clélia dans un meilleur monde, mais il avait trop d'esprit pour ne pas sentir qu'il avait beaucoup à réparer. / [...] / [...]. La comtesse en un mot réunissait toutes les apparences du bonheur, mais elle ne survécut que fort peu de temps à Fabrice, qu'elle adorait*, et qui ne passa qu'une année dans sa chartreuse. / Les prisons de Parme étaient vides, le comte immensément riche, Ernest V adoré de ses sujets qui comparaient son gouvernement à celui des grands-ducs de Toscane*. » (Stendhal, *La Chartreuse de Parme* II, *Œuvres complètes*, tome 25, Genève, Cercle du Bibliophile, 1969, pp.372-373. 尚, 引用文中の*印は, その印のついた箇所に関して, スタンダールがシャペール本等にヴァリエントやメモを残したことを示しているが, そうしたヴァリエント等は, ここでは省略する。)
- 2) « Ici, nous demandons la permission de passer, sans en dire un seul mot, sur un espace de trois années. / [...] / Après ces trois années de bonheur divin, l'âme de Fabrice eut un caprice de tendresse qui vint tout changer. » (*Ibid.*, p.365. 下線は筆者による。)
- 3) 例えば, モーリス・バルデッシュは, 「幸福」を『パルムの僧院』の主要なテーマのひとつと捉え, « C'est toute la *Chartreuse* qui s'organise, en réalité, autour du thème du bonheur. » と書いている。(M. Bardèche, *Stendhal romancier*, La Table Ronde, 1947, p.403.)
- 4) Stendhal, *Lettres d'amour*, Seyssel, Editions Champ Vallon, 1993.
- 5) *Ibid.*, p.8.
- 6) スタンダール『恋愛論・恋愛書簡』(人文書院『スタンダール全集』第八巻)1977. 尚, この邦訳の『恋愛書簡』は, 後に述べるように, プレイヤッド版の『書簡集』を底本としており, 選択された手紙も, また, その分類や配列の方法も, デル・リット氏編纂の『恋愛書簡』とは異なっていることは勿論である。
- 7) 私の手元にある宣伝用のパンフレットに拠れば, こうした「スタンダールの手紙」と「スタンダールへの手紙」を区別せずに配列する方法は, 新しい『書簡集』においても採用されているらしい。尚, 三月に出版されることになっていたこの『書簡集』の第一巻は, 既に注文済だが, また, 私の許には届いていない。
- 8) *Lettres d'amour*, édition citée, p.8 et p.167.
- 9) « [...], Stendhal n'a écrit, en fait, qu'une œuvre unique. [...]. Et de cette œuvre unique il est lui-même le protagoniste. » (*Œuvres intimes* I, Gallimard, Bibliothèque de La Pléiade, 1981, p.IX.)
- 10) *Lettres d'amour*, édition citée, p.8.
- 11) *Ibid.*, p.8.
- 12) *Catalogue du Fonds Stendhal. Deuxième partie. Manuscrits.*, Ville de Grenoble, 1995.
- 13) *Campagne en Russie. Sur les traces de HENRI BEYLE dit Stendhal*, Editions Maisonneuve et Larose, 1995.
- 14) *Correspondance* I, Gallimard, Bibliothèque de La Pléiade, 1968, p.1462.
- 15) « Congé 1^{er} décembre 1815. [...] / [...] / J'y retourne, le 12 décembre après le salasso, Rey(?) présent qui avait parlé de sa prétendue passion, elle me répète cette belle lettre et je me cède à la fièvre tierce. » (*Ibid.*, p.1241. 下線は筆者による。) 他方, 『恋愛書簡』のテキストは, « Congé 1^{er} décembre 1815. [...] / [...] / J'y retourne, le 12 décembre après le salasso, Rey(?) présent qui avait

parlé de sa prétendue passion, elle me répète cette belle lettre et je me réduis à la fièvre tierce. » (*Lettres d'amour*, édition citée, p.17. 下線は筆者による。) となっており、本文中で触れた動詞の違いの他にもう一箇所、下線を施したイタリア語の単語についても、変化が見られる。

- 16) 鈴木昭一郎『スタンダール』(清水書院)1991, pp.80-81.
- 17) « Les cinq premières lettres de Mélanie sont des copies de la main de Stendhal, les cinq autres sont les originaux restées dans les papiers de l'écrivain, [...] ». (*Lettres d'amour*, édition citée, p.24. 下線は筆者による。)
- 18) « Stendhal n'a conservé que la copie des lettres de Mélanie. » (*Correspondance I*, édition citée, p.1444.)
- 19) *Lettres d'amour*, édition citée, pp.26-29 et p.36 及び, *Correspondance I*, édition citée, pp.1444-1445 の LETTRE 23, LETTRE 25 et LETTRE 26 に関する注を参照。
- 20) *Catalogue du Fonds Stendhal. Deuxième partie. Manuscrits.*, édition citée, p.54 et p.128.
- 21) 『恋愛書簡』に収められた「メラニーからアンリへ」の一通目の手紙は、次のような書き出しで始まっている。「Je suis arrivée hier soir bien fatiguée, [...] ». (*Lettres d'amour*, édition citée, p.25.) 尚、この手紙は1805年5月18日付である。他方、四通目の手紙——1805年6月22日付の手紙の最後は、「Je le crains, mais il faut me le pardonner. / J'ai reçu des... 」となっており、最後に « Stendhal n'a pas copié la suite. » という注がつけられている。(*Ibid.*, p.36.)
- 22) *Catalogue du Fonds Stendhal. Deuxième partie. Manuscrits.*, édition citée, p.217 et p.227.
- 23) *Lettres d'amour*, édition citée, pp.8-9 et p.24.
- 24) *Ibid.*, p.9.
- 25) *Catalogue du Fonds Stendhal. Deuxième partie. Manuscrits.*, édition citée, p.138 et p.151.
- 26) *Correspondance I*, édition citée, p.1295 の LETTRE 90 に関する注を参照。
- 27) « La lettre d'amour destinée à la femme aimée est précédée d'un brouillon souvent assez laborieux. » (*Lettres d'amour*, édition citée, p.9. 下線は筆者による。)
- 28) *Ibid.*, pp.9-10.
- 29) スタンダールにおける言語や文体の問題を論じた文献は、直ぐに思いつくものだけでも十指に余るので、今回は省略させて頂く。
- 30) F. Michel, « Lettres inédites. Stendhal, la comtesse et le comte Daru », *Etudes stendhaliennes*, Mercure de France, 1972, pp.338.
- 31) P. Cheremeteff de Mazières, « Notes sur la mission d'étude de 1991-1992, ses objectifs et ses résultats. », *Campagne en Russie. Sur les traces de HENRI BEYLE dit Stendhal*, édition citée, pp.25-29 及び, « Lettre de Stendhal », *ibid.*, pp.30-45 (特に, p.45 の Yves Jocteur Montrozier による解説を) 参照。
- 32) P. Cheremeteff de Mazières, article cité, p.28.
ダリュ伯爵夫人に宛てて書かれた三通の手紙の複製の写真は, *Campagne en Russie. Sur les traces de HENRI BEYLE dit Stendhal*, édition citée のそれぞれ, pp.31-33, pp.34-36, pp.38-39 に掲載されている。また、その複製の写真と併せて、真筆の手紙に基づいてなされたと思われる新たな判読に拠るテキストが活字で再現されている。例えば pp.31-33 にオリジナルの写真とそのテキストが活字で載っているのは、1812年10月16日付の手紙だが、新たな判読に拠れば、アラビア数字が使われているところが、プレイヤッド版では、綴り字で書かれていたり、また、同じ手紙の中程、プレイヤッド版では « Ils devaient avoir quelque reconnaissance à la volupté. » (*Correspondance I*, édition citée, p.675.) となっている箇所が、新しい判読に拠るテキストだと « Ils devaient avoir aussi quelque reconnaissance à la volupté. » (*Campagne en Russie. Sur les traces de HENRI BEYLE dit Stendhal*, édition citée, p.32.) となっている。しかし、Cheremeteff de Mazières も書いているよう

に (P. Cheremeteff de Mazières, article cité, p.28.), 自筆の手紙の複製の状態があまり良くないので、プレイヤッド版と新たな判読のどちらが正しいのか、*Campagne en Russie. Sur les traces de HENRI BEYLE dit Stendhal* に掲載されている写真を見ただけでは、判断がつかかねる箇所もあることを付け加えておきたい。(下線は筆者による。)

- 33) *Ibid.*, pp.34-36.
- 34) *Correspondance III*, Gallimard, Bibliothèque de La Pléiade, 1968, p.769 の LETTRE 6 に関する注を参照。
- 35) « Lundi, 18 juin [1810]. / Je reçus hier ce billet : / « Si mon cousin Beyle n'a pas d'engagement pour demain, il serait bien aimable de venir dîner demain en famille chez sa cousine. / « A.D. » » (*Journal, Œuvres intimes I*, édition citée, p.598. 尚、この短信の由来については、同書の p.1372 の注を参照。)
- 36) « Journée contente. Je le répète, Mme Palfy a été au mieux avec moi, comme dans les plus beaux temps, comme dans le même lieu, il y a un mois environ. » (*Ibid.*, p.599.)
- 37) « Aux époques où se placent les deux lettres de M^{me} Daru, on est revenu enfin, de part et d'autre, et de mécompte en mécompte, à cet irréprochable et affectueux cousinage. » (F. Michel, article cité, p.338.)
- 38) *Ibid.*, pp.338-339, p.340 et p.341 を参照。
- 39) *Lettres d'amour*, édition citée, pp.51-54.
- 40) *Journal, Œuvres intimes I*, édition citée, p.1361 の p.578 に関する注を参照。
- 41) ベールのダリュ伯爵夫人への恋を論じる際、この恋の性質に疑問を投げかける批評家は多い。しかし、その理由として、彼女が彼の恩人の妻であったということばかりでなく、アレクサンドリーヌが既に五人の子供の母親であり、当時、六人目の子を身籠もっていたことをしきりと強調したがるのが、私にはよく分からない。かのメチルドとて、二人の子持ちだったではないか。子供の数が二人ならマドンナの資格を認められて、五人では変だ、という発想を変だ、と思うのは私だけだろうか。
- 42) ベールが夫人に数多くの偽名を与えていることについて、アンリ・マルチノーやミシェル・クルーゼは、それぞれのスタンダールの伝記の中で、こうした変名マニアは、現実の伯爵夫人を覆い隠し、そうすることで、彼の「恋」をより高貴でロマネスクなものにする役割を担っていると解釈している。詳しくは、H. Martineau, *Le Cœur de Stendhal I*, Albin Michel, 1952, p.266 及び、M. Crouzet, *Stendhal ou Monsieur Moi-même*, Flammarion, 1990, p.151 を参照。
- 43) *Lettres d'amour*, édition citée, p.49.
- 44) このエピソードについて、マルチノーやミシェルは、ベールが問題となっている手紙を印刷までさせたのではないかと推測したが、具体的な証拠になるようなものは見つからなかったようだ。H. Martineau, *op.cit.*, p.268 及び、*Journal, Œuvres intimes I*, édition citée, p.1412 の p.698 に関する注を参照。
- 45) *Journal, Œuvres intimes I*, édition citée, pp.701-702.
- 46) « — Comment! qu'est-ce qu'il y a? Est-ce qu'il y a quelque chose d'extraordinaire? Je vous promets que je vais le lire en rentrant [...]. » (*Ibid.*, p.702.)
- 47) 恋愛において、自分が愛されていると思ひ込み易いベールの傾向について、マルチノーは、かなり手厳しい調子で次のように書いている：« Vraiment incorrigible dans ses illusions sur les femmes, — ne le sera-t-il pas toute sa vie? — il ne pouvait croire que l'estime, la confiance, la liberté des propos et des manières, pouvaient aller sans l'amour. » (H. Martineau, *op.cit.*, p.243.). 私としては、彼のそうした傾向を（気持ちが悪いとは思っても）批判する気はないが（批判したところで、全く意味がないので）、ただ、「incorrigible」だったという点では、マルチノーの指摘は当たっているの

- ではないかと思う。というのは、彼が晩年になって書き綴った「Earline」に関するメモを読んでいると、ダリュ伯爵夫人への「恋」を描いた日記と同様の傾向が窺えるからである。詳しくは、*Journal, Œuvres intimes II*, Gallimard, Bibliothèque de La Pléiade, 1982 の1840年のページ（特に、pp.369-381）を参照。
- 48) 『恋愛書簡』に収録された「アンリからアレクサンドリーヌへ」の手紙について、デル・リット氏は、その解説の中で、スタンダールが返事が来ないことを承知で書いたのだと明言している (*Lettres d'amour*, édition citée, p.50.)。確かに、問題となっている手紙（あるいは日記）には、次のようなメモがスタンダールの手で書き加えられている：「Cet homme est à jeter par les fenêtres. 1819.」 (*Ibid.*, p.54.) しかし、その一方で、同じ1819年にペールは、「1811 / HISTOIRE D'UNE PARTIE / DE MA VIE」と題されたノート——あるいは、「A / CONSULTATION EN FAVEUR / DE LA DUCHESSE DE B*** POUR BANTI」というタイトルを引用した方がポピュラーかも知れないが——そのノートの余白に以下のようなメモを残している：「Relu avec beaucoup d'utilité, et pour la première fois, je crois, huit ans après, le 28 avril 1819; je trouve Banti bien singulier, bien faible, bien timide, et la pauvre Al[exandrine] bien malheureuse d'aimer un homme à visions.」 (*Journal, Œuvres intimes I*, édition citée, p.1058. 下線は筆者による。)
- 49) «Lundi, 19 mars [1810]. / Io sono anche per la prima volta stato amabile coll terribile Z.」 (*Ibid.*, p.553.)
- 50) «18 avril 1810. / [...] / [...], mais ce fut une journée heureuse et même très heureuse, la première fois de ma vie que j'aie eu de l'esprit deux heures de suite en présence du terrible Z.」 (*Ibid.*, p.565.)
- 51) «[...] le petit cousin dans ces scénarios se prend pour le favori d'une grande dame, [...] il devient le rival de son grand et terrible cousin. N'aime-t-il que pour cette revanche, cette victoire sur le protecteur redouté-hai?」 (M. Crouzet, *op.cit.*, pp.151-152.)
- 52) «L'homosexualité intérieure et virtuelle de Stendhal, c'est aussi ce désir d'être désirable qui s'exprime par le désir pour ceux qui le sont.」 (Ph. Berthier, «Portrait de Stendhal en évêque de Clogher», *Stendhal Club*, 98, 15 janvier 1983, p.252.)
- 53) «Il [Stendhal] était amoureux de l'amour, l'«amour passion», bien sûr.」 (*Lettres d'amour*, édition citée, p.50.)
- 54) «[...] il [Henri] vit son plus étrange roman d'amour : [...]」 (M. Crouzet, *op.cit.*, p.150. イタリアリック体は、クルーゼによる。)
- 55) ただし、スタンダールの世界において、「狂気 «la folie»」という言葉あるいは概念が、多義的な意味及び価値を与えられていることは付け加えておきたい。
- 56) *Lettres d'amour*, édition citée, p.61.
- 57) *Correspondance I*, édition citée, p.1363 の LETTRE 468 及び、p.1364 の LETTRE 471 に関する注を参照。
- 58) *Campagne en Russie. Sur les traces de HENRI BEYLE dit Stendhal*, édition citée, p.45. 尚、アンジェリーヌに宛てて書かれたこのイタリア語の手紙の複写の写真は、同書の p.24 に掲載されている。
- 59) *Lettres d'amour*, édition citée, p.61.
- 60) 鈴木昭一郎『スタンダール』, p.82.
- 61) 何を称して「不幸な恋愛」と呼ぶのか、本来なら定義を必要とするところだが、例えば、西川長夫氏は『スタンダールの遺書』の中で、この作家の遺書に、妹のポーリーヌを除くと女性の名が極めて少ないことに触れ、以下のように続けている。「スタンダールの男の友人にたいする関係は恒常的、安定的であるが、女性にたいする関係はどちらかと言えば不安定であり長続きしないものが多い。それは不幸な恋人の一面であった。彼は絶えず恋しており、その結果いつも絶望していた。」

- スタンダールにとって女にたいする愛は、たとえ現実に女を愛しているときでさえ、ロマネスクな想像の世界のできごとであったにちがいない。」(西川長夫『スタンダールの遺書』(白水社)1981, p.199.)氏がこの著作の中で論じているテーマと、私がこの拙文において提示している問題とは、交錯する点が非常に多いので、いずれ、改めて本格的な論文の中で検討したいと思う。
- 62) あまりにも有名な『エゴチスムの回想』と『アンリ・ブリュールの生涯』の中の一節を、それでも一応、引用しておきたい：« Je quittai Milan pour Paris, le [un blanc] juin 1821, avec une somme de 3 500 francs, je crois, regardant comme unique bonheur de me brûler la cervelle quand cette somme serait finie. Je quittais, après trois ans d'intimité, une femme que j'adorais, qui m'aimait et qui ne s'est jamais donnée à moi. » (*Souvenirs d'égotisme, Œuvres intimes II*, édition citée, p.432.); « En 1821, j'avais beaucoup de peine à résister à la tentation de me brûler la cervelle. Je dessinais un pistolet à la marge d'un mauvais drame d'amour que je barbouillais alors [...] » (*Ibid.*, p.432.); « En 1821, je quittai Milan, le désespoir dans l'âme à cause de Métilde, et songeant beaucoup à me brûler la cervelle. » (*Vie de Henry Brulard, Œuvres intimes II*, édition citée, p.540.); « Clémentine est celle qui m'a causé la plus grande douleur en me quittant. Mais cette douleur est-elle comparable à celle occasionnée par Métilde qui ne voulait pas me dire qu'elle m'aimait? » (*Ibid.*, p.544.)
- 63) « Enfin je pris congé de Métilde. / « Quand reviendrez-vous? me dit-elle. / — Jamais, j'espère. » / Il y eut là une dernière heure de tergiversations et de vaines paroles; une seule eût pu changer ma vie future. » (*Souvenirs d'égotisme, Œuvres intimes II*, édition citée, p.432.)
- 64) 例えば、マチルドの手紙を検討することで、スタンダールのフィルターを通さないマチルド像を提示したアニー・コレ氏は、次のように書いている：« Choissant la littérature, il sait que la réalité lui échappe, que Metilde ne sera jamais sienne et pourtant il espère encore. Parfaitement lucide, il se livre contre la raison, à une passion douloureuse qui, une fois maîtrisée, donnera vie aux romans. Metilde autant que Milan, est donc la clé de l'œuvre stendhalienne. » (*Annie Collet, Stendhal et Milan I*, J. Corti, 1986, p.93.)
- 65) *Catalogue du Fonds Stendhal. Deuxième partie. Manuscrits.*, édition citée, p.54, pp.56-57 et p.59.
- 66) *Correspondance I*, édition citée, p.1415, pp.1418-1419 et pp.1424-1425 のそれぞれ, LETTRE 675, LETTRE 684 et LETTRE 705 に関する注釈を参照。
- 67) *Ibid.*, p.1433 の LETTRE 724 に関する注を参照。
- 68) *Ibid.*, p.1417 の LETTRE 680 に関する注を参照。
- 69) *Ibid.*, pp.1415-1416 の LETTRE 676 についての説明を参照。
- 70) スタンダール『恋愛論・恋愛書簡』, pp.450-451.
- 71) *Correspondance I*, édition citée, pp.983-984 et p.1418 を参照。
- 72) *Catalogue du Fonds Stendhal. Deuxième partie. Manuscrits.*, édition citée, p.68.
- 73) « [...] : Je n'aurais jamais cru que vous manquiez à ce point de discrétion et que vous essayeriez de me compromettre. » (*Lettres d'amour*, édition citée, p.70.)
- 74) « Je trouve la réponse en quatorze pages au clou des clefs; [...] / Cette réponse, datée, à la fin, du 26, n'est pas venue par la poste [...]. » (*Ibid.*, p.88. 尚, 下線は筆者による。)
- 75) « J'ai reçu votre lettre il y a trois jours. » (*Ibid.*, p.98.)
- 76) *Ibid.*, p.70.
- 77) « — Je ne serai pas indiscret; je ne prétends rien vous dire; je serai aimable. » (*Ibid.*, p.103.)
- 78) スタンダールの *le Journal* « élaboré » と *le Journal* « reconstitué » については, *Journal, Œuvres intimes I*, édition citée 中のデル・リット氏による序文と『日記』に関する概要 (la Notice) を参照。(*Journal, Œuvres intimes I*, édition citée, pp.XIV-XVI et pp.1114-1118.)

- 79) « *I will see her the 2nd j[anvier]. I made visits to her for nothing 3 four* the day of 1821.* » (*Journal, Œuvres intimes II, édition citée, p.51.* 尚, *印のついた « 3 four » については, « lecture douteuse » という注がついている。同書の p.1036 を参照。)
- 80) « *Ended the first january 1821. I will see Léo[nore] to-morrow, and reading I think to her.* » (*Ibid., p.51.*)
- 81) « *To-morrow I will see L[éonor]e.* » (*Ibid., p.51.*)
- 82) « *12 janvier 1821. I believed to see her to-day; probably to-morrow.* » (*Ibid., p.52.*)
- 83) 例えば, 1819年6月11日付の手紙の下書きの中には, 次のような一節がある: « *Je puis dire que ce moment a été l'un des plus heureux de ma vie, mais il m'est entièrement échappé. Telle est la triste destinée des âmes tendres; on se souvient des peines avec les plus petits détails, et les instants de bonheur jettent l'âme tellement hors d'elle-même qu'ils lui échappent.* » (*Lettres d'amour, édition citée, p.86.*)あるいは, 同年の7月20日付の手紙より: « *Heureux le cœur qui est échauffé par la lumière tranquille, prudente, toujours égale d'une faible lampe! De celui-là, on dit qu'il aime, et il ne commet pas d'inconvenances nuisibles à lui et aux autres. Mais le cœur qui est embrasé des flammes d'un volcan ne peut plaire à ce qu'il adore, fait des folies, manque à la délicatesse et se consume lui-même. Je suis bien malheureux.* » (*Ibid., p.97.*) また, 前出の « *le Journal « reconstitué »* » に収録された1819年11月25日付のメモ: « *Lettre to M[atilde]: / J'ai un malheureux caractère qui est fait pour aimer et pour être enthousiaste, et je manque de prudence, même dans les affaires les plus prosaïques.* » (*Journal, Œuvres intimes II, édition citée, p.35.*)
- 84) マチルドの生涯, 及び, 当時, 彼女が置かれていた状況については, A. Collet, *op.cit.*, pp.26-107 et M. Crouzet, *op.cit.*, pp.282-292 を参照。
- 85) « *Je me déteste moi-même; si je n'étais pas le dernier des hommes, ne devais-je pas avoir une explication décisive hier avant votre départ, et voir clairement à quoi m'en tenir?* » (*Lettres d'amour, édition citée, p.76.*)
- 86) « *En votre présence, je suis timide comme un enfant, la parole expire sur mes lèvres, je ne sais que vous regarder et vous admirer. Faut-il que je me trouve si inférieur à moi-même et si plat?* » (*Ibid., p.77.*)
- 87) « *Voici le naturel of this man.* » (*Ibid., p.77.*)
- 88) « *Dès que j'aime, je deviens timide et vous pouvez en juger par le décontenancement dont je suis auprès de vous.* » (*Ibid., p.80.*)
- 89) « *Aimez-moi, si vous voulez, divine Métilde, mais, au nom de Dieu, ne me méprisez pas. Ce tourment est au-dessus de mes forces.* » (*Ibid., p.82.*)
- 90) « *[...]; en sortant de la porte, ce fut par hasard que je ne pris pas à droite; [...] je voulais être bien tranquille et tout à mes réflexions. Ce fut ainsi que je fus amené au pré où vous vîntes plus tard. Je m'appuyai contre le parapet et je restai là deux heures à regarder cette mer qui m'avait porté près de vous et dans laquelle j'aurais mieux fait de finir mon destin.* » (*Ibid., p.85.*)
- 91) « *Mais le lendemain, le bras de Mathilde, entrevu entre la manche de sa robe et son gant, suffisait pour plonger notre jeune philosophe [Julien] dans des souvenirs cruels, et qui cependant l'attachaient à la vie.* » (*Le Rouge et le Noir, Editions Garnier Frères, 1973, p.397.*)
- 92) こう考えるジュリアンの念頭には, マチルドの周囲にいるクロワズノワ侯爵をはじめとする青年貴族たちが, 彼にとって優位な立場にあるライヴァルとして存在していると考えられるであろう。
- 93) « *Quelle garantie peut-elle me donner avec son caractère? Hélas! mon peu de mérite répond à tout. Je manquerai d'élégance dans mes manières, ma façon de parler sera lourde et monotone. Grand Dieu! Pourquoi suis-je moi?* » (*Le Rouge et le Noir, édition citée, p.397.*)

- 94) « Adieu, Madame, soyez heureuse; je crois que vous ne pouvez l'être qu'en aimant. Soyez heureuse, même en aimant un autre que moi. » (*Lettres d'amour*, édition citée, p.101.)
- 95) « Que désire-t-elle? D'être aimée ardemment. » (*Ibid.*, p.98.)
- 96) « Ainsi furent réduites en cendres les 282 lettres de Menti — Clémentine Curial. » (*Correspondance II*, Gallimard, Bibliothèque de La Pléiade, 1967, p.X.)
- 97) « Romain Colomb les [les lettres à Stendhal] avait pieusement conservées par devers lui se limitant à détruire celles qui lui semblaient compromettantes. Les lettres d'amour furent donc vouées au bûcher. » (*Ibid.*, p.X.)
- 98) « En rentrant chez moi à deux heures, après vous avoir quittée. » (*Lettres d'amour*, édition citée, p.115.)
- 99) *Correspondance II*, édition citée, pp.944-945 の LETTRE 760, LETTRE 761, LETTRE 762, LETTRE 764 et LETTRE 765 の注釈を参照。
- 100) *Ibid.*, p.1131 の LETTRE 258 の注, 及び, M.-J. Durry, « Une passion de Stendhal: Clémentine », *Editions du Stendhal-Club (1922-1935), Numéros 1 à 35*, Genève, Slatkine reprints, 1974, *Editions du Stendhal-Club, N° 22*, p.3 を参照。
- 101) A. Cordier, *Stendhal raconté par ses amis et ses amies*, A. Laisney, 1893; — *Comment a vécu Stendhal*, Villerelle, s.d., 1906.
- 102) *Catalogue du Fonds Stendhal. Deuxième partie. Manuscrits.*, édition citée, pp.XV-XVII.
- 103) *Ibid.*, p.162.
- 104) *Ibid.*, p.166.
- 105) この三通の手紙というのは, それぞれ, *Correspondance II*, édition citée, p.792 と p.800 にある LETTRE 132 と LETTRE 139, 及び, *Correspondance III*, édition citée, p.535 の LETTRE 275 である。内, LETTRE 132 と LETTRE 275 が要約であり, LETTRE 139 は, 手紙の一部の写しと思われる。
- 106) *Lettres d'amour*, édition citée, pp.125-128.
- 107) « Brouilles des premiers mois [...] ». » (*Ibid.*, p.128.)
- 108) « A droite, au bas de la troisième page, des traces de larmes qui ont brouillé l'écriture. » (*Correspondance II*, édition citée, p.1092.) また, M.-J. Durry, article cité も参照。
- 109) *Correspondance II*, édition citée, p.995 の LETTRE 915 の注を参照。
- 110) « Cette lettre, que j'écris dans ma langue maternelle [...] ». » (*Lettres d'amour*, édition citée, p.150.)
- 111) *Correspondance II*, édition citée, p.1114 の LETTRE 205 の注 2 を参照。
- 112) *Lettres d'amour*, édition citée, pp.151-152.
- 113) « 20 avril 1833. / I answer to the fatal letter of Pietrasanta. » (*Journal, Œuvres intimes II*, édition citée, p.180 及び p.1105 のデル・リット氏による注を参照。)
- 114) *Correspondance II*, édition citée, p.1126 の LETTRE 243 の注を参照。
- 115) *Catalogue du Fonds Stendhal. Deuxième partie. Manuscrits.*, édition citée, p.XVII (特に, 注の②4) を参照。
- 116) *Correspondance III*, édition citée, p.756 の LETTRE 300 及び LETTRE 301 の注を参照。
- 117) *Correspondance II*, édition citée, p.045 の LETTRE 1196 の注を参照。
- 118) F. Michel, « Les Amours de Sienne », *op.cit.*, pp.142-143.
- 119) 例えば, 手紙の最初の段落は, ミシエルの版では五つの文から成っているが, それに対して, プイレヤッド版では, ミシエルのテキストの四つ目と五つ目の文の間に, « Pour me consoler, donnez-moi mille détails. » (*Correspondance II*, édition citée, p.511.) という一文が挿入されている。

- 120) この手紙は、既にコロン版にも収録されているが、プレイヤッド版の注に、「Original: Collection de M.C. Stryienski. Lettre mutilée dans l'édition de 1855 [...]. Rétablie ici dans le texte original. » (*Ibid.*, p.1045.) というポプ版の注が再録されているため、コロン版ではなく、ポプ版に準じたのではないかと推測した。他方、プレイヤッド版のこの手紙の注の中にあるヴァリエーション等は、前出のミシエルの論文で発表されたテキストに付けられた注釈に拠っていると思われる。(F. Michel, « Les Amours de Sienne », *op.cit.*, pp.142-143 の注を参照。) 尚、『恋愛書簡』に関して、「プレイヤッド版に準じているようだ。」と断定を避けたのは、この手紙にスタンダールがつけたメモに関して、一箇所、〈la ponctuation〉の違いがあるからである。プレイヤッド版で « Ecrit le 20 avril samedi, [...] » (*Correspondance II*, édition citée, p.512.) となっている箇所が、『恋愛書簡』では « Ecrit le 20 avril, samedi, [...] » (*Lettres d'amour*, édition citée, p.154.) となっている。
- 121) 鈴木昭一郎『スタンダール』, p.204 及び p.239.
- 122) F. Michel, « Les Amours de Sienne », *op.cit.*, pp.148-152.
- 123) *Lettres d'amour*, édition citée, p.161 及び、直ぐ前の注の F. Michel の論文を参照。
- 124) « Quoi qu'il en soit, il est resté célibataire, ce qu'il n'a pas dû regretter par la suite. » (*Lettres d'amour*, édition citée, p.161.)
- 125) « [...], en dépit du titre, l'ouvrage est terminé quand le comte et la comtesse Mosca rentrent à Parme et que Fabrice est archevêque. » (*La Chartreuse de Parme II*, édition citée, pp.508-509. 尚、セルクル・デュ・ビプリオフィル版の注にもあるように (また、『パルムの僧院』の愛読者なら周知のことだが)、モスカ伯爵夫人、つまり、サンセヴェリーナは、エルネスト五世との約束を果たした後、パルムを去って以後、パルムには戻っていないので、これは、バルザックの勘違いである。)
- 126) « J'ai fait la Chart[reuse] ayant en vue la mort de Sandorino, fait qui m'avait vivement touché dans la nature*. M. Dupont m'a ôté la place de la peindre. » (*Correspondance III*, édition citée, p.396. 尚、*印のついている箇所については、最初は « réalité » と書かれていたと、プレイヤッド版の注に記されている。同書の p.732 の注18を参照。)
- 127) 例えば、クレシェンチ侯爵との結婚までクレリアが身を潜めていたコンタリニ邸にファブリスが忍んで行く場面に、「M. Dupont me forçait à ces phrases par son désir d'abrégé. » (*La Chartreuse de Parme II*, édition citée, p.310.) といったメモがシャペール本に残されているようだ。
- 128) 中川久定「自然と情熱の発見 (1) ——『パルムの僧院』にそくして」、『岩波講座：文学5——表現の方法』(岩波書店) 1976, p.80.
- 129) « Mosca que d'ailleurs l'auteur ne compare jamais à un oiseau est d'une autre race que Fabrice, Clélia et Gina qui sont tous à la fois oiseaux et anges. / [...]. Loin de le [Mosca] croire un ange, nous sommes tenté de le nommer « un oiseau déchu ». » (S. Simokawa, « Le motif des oiseaux dans « La Chartreuse de Parme » », *Stendhal Club*, 127, 15 avril 1990, p.287.)
- 130) « [...], c'était l'instinct de courtisan qui vous [Mosca] prenait à la gorge; sans vous en douter, vous préférerez l'intérêt de votre maître à celui de votre amie. » (*La Chartreuse de Parme II*, édition citée, p.70.)
- 131) « J'ai deux chiens que j'aime tendrement; l'un, noir, épagneul anglais, beau, mais triste, mélancolique; l'autre, *Lupetto*, café au lait, gai, vif, le jeune Bourguignon, en un mot; j'étais triste de n'avoir rien à aimer. » (*Correspondance III*, édition citée, p.462. 尚、私がこの一節に目を止めたのは、スタンダールの書簡を読んでいた時ではなく、鈴木昭一郎氏の『スタンダール』の巻末の年表の中にこの文章が引用されているのを見た時である。勿論、その後、原文に当たり直したが、孫引きもどきであることに変わりはない。)
- 132) この第四十六章は、草稿では第四十二章となっている。
- 133) « Je passerais dans d'horribles douleurs les cinq, dix, vingt ou trente ans qui me restent à vivre

- qu'en mourant je ne dirais pas : « Je ne veux pas recommencer. » » (*Vie de Henry Brulard, Œuvres intimes* II, édition citée, p.958.)
- 134) « Je viens de réfléchir deux heures à la conduite de mon père à mon égard, étant tristement miné par un fort accès de la fièvre lente que j'ai depuis plus de sept mois. [...] » « Sans l'étude, ou, pour mieux dire, l'amour de la gloire qui a germé dans mon sein malgré lui, je me serais brûlé la cervelle cinq ou six fois. » (*Journal, Œuvres intimes* I, édition citée, p.189.)
- 135) 西川長夫『ミラノの人スタンダール』(小学館)1981, p.34.
- 136) « Voici un intervalle* de bonheur fou et complet; [...] » (*Vie de Henry Brulard, Œuvres intimes* II, édition citée, p.956. 尚, *印のついた箇所については, プレイヤッド版の注にヴァリエントが記載されているが, ここでは省略する。)
- 137) スタンダールは, その1801年4月18日付の日記の中で, 次のように書いている: « Je ne sais si j'aurai la force de remplir ce projet, déjà commencé à Paris. » (*Journal, Œuvres intimes* I, édition citée, p.3. 下線は筆者による。) このバリでベールが書いたという日記は, 今日, 我々の手には届いていないが, しかし, デル・リット氏は, 同書の注釈で, 彼がわざわざ虚偽の発言をしているとも思えない, と主張している。(*Ibid.*, p.1120.)
- 138) 1801年5月2日の日記を参照。(*Ibid.*, p.5.)
- 139) 1801年7月12日の日記を参照。(*Ibid.*, p.18.)
- 140) 1801年9月23日の日記を参照。(*Ibid.*, p.24.)
- 141) « Joinville, Marigner, Mazeau, Aug[uste], Petiet, Mme Grua, la Gafforini, Grua, Giletti, etc. passent pour aller à Venise; j'y serais allé s'il y avait eu une place dans une des trois voitures. » (*Ibid.*, p.23. 尚, 下線は筆者による。)
- 142) « Une chose à laquelle j'étais loin de m'attendre c'est la charmante amabilité des femmes de ce pays; tu ne me croiras pas, mais vraiment en ce moment je serais au désespoir de retourner à Paris. » (*Correspondance* I, édition citée, p.7.)
- 143) « [...] un voyage assez agréable [...] » (*Ibid.*, édition citée, p.8.)
- 144) « Je viens, [...], d'un bal où je me suis ennuyé à la mort, [...] » (*Ibid.*, p.11.)
- 145) *Ibid.*, p.16.
- 146) « Quant à la danse, le temps humide qu'il me fait [*sic*] me fait souffrir comme un diable d'un coup de sabre que j'ai au pied; je fais donc tout bonnement tapisserie. » (*Ibid.*, p.19.)
- 147) *Ibid.*, p.21.
- 148) *Ibid.*, pp.24-25.
- 149) « Si nous restons en Italie, lorsque tout sera bien établi, je demanderai un congé. » (*Ibid.*, p.26.)
- 150) « Imagine-toi que je suis ici sans une ligne de français; [...] » (*Ibid.*, p.26.)
- 151) « Depuis deux ans nous avons été presque étrangers l'un à l'autre; [...] » (*Ibid.*, p.28.)
- 152) *Ibid.*, p.28.
- 153) « Je pense à toi mille fois le jour, je me fais un plaisir de te revoir grande, belle, instruite, aimable, aimée de tout le monde. C'est cette douce idée qui me rappelle sans cesse à Grenoble. Je compte y être dans neuf mois d'ici. Je pourrais bien y aller tout de suite, mon colonel m'a offert un congé, mais mon devoir me retient au rég[imen]t. » (*Ibid.*, p.30.)
- 154) « J'ai connu en Italie une femme nommée Angéline que j'ai aimée au delà de toute expression. » (*Ibid.*, p.149.)
- 155) « Mme Pietra Grua, c'est différent : son souvenir est lié à celui de la langue italienne. » (*Ibid.*, p.442.)
- 156) « Ne pouvant être aimé de Mme P[ietragrua], qui était aimée de Louis, dans les millions de

châteaux en Espagne* que j'ai faits pour elle, je me figurais de revenir un jour colonel [...], de l'embrasser* alors et de fondre en larmes. » (*Journal, Œuvres intimes I*, édition citée, p.735. 尚, *印のついた箇所については、プレイヤッド版の注にヴァリエントが載っている。特に、最初の*印のついた一節は、二箇所について、削除しては書き直した形跡があるようである。詳しくは、同書の p.1439 を参照。) また、『日記』の中には、以下のような記述も見受けられる。1806年3月30日の日記より： « Ce temps, que nous eûmes en revenant à Marseille, me rappela Milan. Quelle émotion j'avais dans les mêmes circonstances, en revenant de la promenade avec Angela Pietragrua! » (*Ibid.*, p.419.)